

雅
湖
錄

八

昭和貳年十月上浣起筆

特別
14
1919
397



○郷人本間氏弘の字家古字はめ同軸を卷す余未原物を見んも丹羽伯公の誤謬に據り其大略を知り得べし金澤文庫旧蔵天平半巻筆字の元をある事殊也書成るるい書二尺に迄らるる新簡なること也讀者此を考へんり余に問ふ左に収あるもの即ち伯公の誤謬也

金澤文庫旧蔵古寫經殘簡

鈴木重胤序文略

古寫經

一行 二拾六字 乃至 二拾六字

冬拾六行 (帳九尺九寸四分 曲尺)

右唐慈恩大師撰法華經玄贊零本係北條越後守顯時所置金澤文庫庫藏紙背縫上有金沢文庫之印卷尾有天平宝字二年戊戌八月七日執筆淳智十六字淳智南都秋篠寺僧云距今一千八十七年矣不知其間經喪乱兵燹幾何苟非神物為之加以護

焉傳久遠其能若斯乎則此雖殘竹間之餘寶亦
世之珍也余三年前遊金沢探文庫之遺址訪其遺書
於知名寺隻字不存慨嘆而歸矣頃一書賈持來以
求償而余覽而狂喜雖欲獲之心甚切而重價殆不
可辦乃與全好謀而購之斯割為廿二枚相俱各寶藏
一枚蓋是舉本雖出於不得已而既已為零本矣且與
藏之一家或罹水火之災危不如分析多喜好古古者而
益傳之久遠也覽者幸勿以斯割之故罪余 天保十五
年甲辰十月 丹羽真跋

追而丹羽伯弘ト共ニ右古寫經ヲ斯割致シ信ハ山王ノ祖父

山泉蒼軒ニ有之候。而テ山王ノ本家ニ越佐兩州國ノ著者

山泉其明ノ子孫ニ有之候

尚古寫經ハ卷ニ仕立アリ候

No.

○十月初旬國者彼デ一ト書ヲ見テ其書ハ全ク本ノ漢云
を敬懐するを例とす、本年生憎詔行七福堂
の講演とて果し得たりしと書懐とす、左ニ収
めらる、頒布者おの一斑とす、尤も多々後ノ人等
本年國者の内ニ、松若春成也ト云々

昭和 年 讀 書 週 間 (自十一月七日)

一日	午後六時より	京橋圖書館 講演會	今澤慈海氏 復興しつゝある獨逸の文藝の味 近代表文藝の味 普選と陪審
二日	午後六時より	中央佛教教會館	神田駿河臺下 井清五郎氏 津久基氏 一氏氏 主 催
四日	午後一時半より	三越講堂	日本橋三越吳服店六階 田魯庵氏 木勘藏氏 田尙雄氏 菅絃と舞臺との話 管絃と舞臺との話 音機使用
七日	午後六時より	讀賣講堂	京橋西紺屋町 市島謙吉氏 談話 市島謙吉氏 高村光雲氏
五日	午後一時より	本所報恩寺 兒童講演會	本所太平町 久留島武彦氏 牛込圖書館 牛込山伏町 講師 久留島武彦氏 牛込山伏町 講師 久留島武彦氏
六日	午後一時より	牛込圖書館 展覽會	牛込山伏町 佐田至弘氏 安倍季堆氏 講師 安倍季堆氏
一日	より引續き毎日	東京自治會館	上野公園竹之臺 東京自治會館 明治文化資料展覽會 日比谷圖書館主催 大橋圖書館 九段牛ヶ淵公園前 大橋圖書館主催 俳書展覽會
自五日至七日		大橋圖書館	大橋圖書館主催 俳書展覽會
自一日至七日		東京堂 三省堂 富山房 丸善株式會社 三越吳服店 松屋吳服店 松坂屋吳服店 ほか 松屋吳服店 其他	丸善株式會社 三越吳服店 松屋吳服店 松坂屋吳服店 ほか 松屋吳服店 其他

讀書週間に就て

日本圖書館協會が毎年その圖書館普及運動として行ふ Library week を、今年拾壹月壹日から向ふ一週間、全國一齊に讀書週間として舉行することゝなつた。東京市に於ても協會主催の講演會の外、帝國圖書館を始めとして各圖書館これに参加し、大書肆大百貨店と聯繫して展覽會講演會等を開催し、また日比谷圖書館に於ては左記優良兒童用圖書の撰擇を行ひ、更に大橋、帝國、日比谷三圖書館の共同調査によつて、最近壹個年間に最も多く讀まれた新刊圖書と精讀された新刊圖書の目録を發表して、一般の參考に供することゝなつた。尙ほ催しの詳細に就いては、ポスタ

兒童讀物六拾種

日比谷圖書館選

Table listing 60 children's books with columns for title, author, and price. Includes titles like '進歩的動物學', '兒童の植物學', '兒童の生理學', '兒童の動物學', '兒童の生活', '兒童の植物學', '兒童の生理學', '兒童の動物學', '兒童の生活', '兒童の植物學', '兒童の生理學', '兒童の動物學', '兒童の生活'.

最新多讀目録圖書新刊(分類別覽回数順)

Table listing various books with columns for title, author, and price. Includes titles like '新開の隨筆', '青年期の心理', '倫理學の概論', '近代文藝思潮概論', '西條八十譯詩集', '梅馬造の愛と憂', '庭園の設計', '無君の憂', '赤い鳥', '怪談傑作', '湖邊の傑作', '地獄の乙女', '十字路の乙女', '恐怖の乙女', '愛の乙女'.

精読新刊圖書目録

此大正九年八月から大正十年八月までの間に刊行された新刊圖書の目録を精選したものである。これを精読目録として掲げる。

Table listing selected books with columns for title, author, and price. Includes titles like '實験心理學精義', '佛敎史の研究', '實験心理學精義', '佛敎史の研究', '實験心理學精義', '佛敎史の研究', '實験心理學精義', '佛敎史の研究'.

○子守書は「の銀文、大改
新多の晩、應し余の法、
裁せしものたのみ」

高田博士新著

『半峰昔ばなし』を讀んで

市島 春城

高田博士の「半峰昔ばなし」といふ本が出版された、自分はその草稿を一々讀んでそれに飽足を添へたわけであるから全篇を通讀した事にはなつてゐるが然し完本になつてからは未だ讀んでほらない然しそれは草稿で讀んだのと異なる所は無い筈である。たゞ出版された本は大部なもので最初は五百頁位のものかと思つた所が上梓されて見ると七百頁といふ大きなものになつてゐる、先づその體裁を見て誠によい心地がする。

一體半峰君は事蹟の頗る豊富な人であるから如何かしてこの人に自分の自叙傳的のものをあらせ度いと考へた事も頗るあるが何しろ君は仲々多忙な人で筆硯に親しむ時間が極めて少ないので折に觸れて自叙傳を物する事を勧めた事もあるがかつて聞入れた事がなく、「自分の如き貧弱な經歷なぞを説き出すべきでなく、且は不遜性だか」

むづかしい、それは現在の英米の海軍の狀態が、ヨーロッパ戦争といふ大なる衝動を受けて、無茶苦茶に艦を作つたその残物が残つてゐるからである、これを具體的に申せば、アメリカは今日日本に三倍する艦隊をもつてゐるがその巡洋艦は日本とほぼ同等である、またイギリスはほとんど日本に三倍する巡洋艦を持つてゐる、しかし艦隊はこれに反し、日本の二倍半にしか過ぎない、また英米の艦隊の比例は、アメリカ三で、イギリス二である、さういふ風に非常にてこぼこになつてゐる、従つてこの不自然な狀態を自然の狀態に直し、同時に制限をするのは至難のわざで、日本はつひに案として提出するに至らなかつたのである、しかしながらこれに關し名案があるなら、日本は異存を唱ふるものではない、ところがアメリカの方では、將來の造艦計畫を決めるといふがごときことは、議會の權能である、政府當局は何等さういふことを決める權限はない、

きものがある、従つてその意味においてどの點も皆活動してゐる、この本に接して先づ愉快の感と興へるはその點にある、唯自分の事はいひ難いものであつてやゝもすれば自分の功績をてらうが如き厭ひも起るものでそれを避け様とするといひ足りないかの如き感と起さしむる、これは蓋し自叙傳的のものを書く場合においては止むなき事と思ふ。然らば本書において欠點は何所にあるかといはゞ恐らく「いひ足りない」といふ點であらうがそのいひ足りない所に著者の人格があるといはねばならぬ。全體この著者は頗る多方面の經歷を持つてゐる、その大學時代に於いては天稟に文學才があると云く認められた人であり殊に西洋の文學に於て大なる天分があると認められた、即ち早く西洋小説に接し或は西洋文を絶無に書く等の點に於ても同感は勿論、先輩をも歴した、若し君が一世の經路を文

もあるのであるが君の用意の如き所までも及ぼされてある事は自分の尤も感服する所いふまでもなく君の人格の然らしむる所である。私は特にこの著書について他人よりも非常なる興味を覺ゆるその理由は博士の履れた經路が自分のそれと多く同じくする點である従つて君の經路談は自分の經路に觸れて來るのである、之れを讀めばさながら自分の經路を見るが如き趣が何となくあるのであつてこの一段は到底他人の味はひ得ざる所である。然し夫れは君と同感であり、同感であり又事を共にしたといふ自分だけの感じであるが恐らく左様な關係の他の人々においても必ず之は興味を興へるであらうと思ふ。その理由は、第一君は一種の批評家である君の種々な事を評するに必ず其一家をなしてゐる、君の觀察なるものは一種の體をなし世人の口似をしてをらぬ例へば君は西洋へ遊ばれ長い旅行の如きもその一例で近來西洋に遊んだ人の旅行文も多々あるが多くは只人を異にして同じ事を説いたに過ぎないのが少くない。然るに君の於ては君ならでは出來ないと思はるゝ觀察をしてゐる、これは一例に過ぎぬが兎に角何事に

自由自在に活用出来る！ 五分間演説と揆の仕方



雄辯の秘訣 新形總クローズ四百八十頁
千部限 特價 壹圓拾錢
雄弁は實に現代活社會に成功する第一の武器である。本書は巧い演説や挨拶の仕方、全篇三百餘頁に分ち、總振假名付でゴク平易懇切明快に詳述して居る。ドンナ話下手口重な人も立ち所に大雄弁家となる事請合、今回新刊記念として前金特價壹圓に割引す(前金送料八錢)代金引替は金壹圓廿五錢

發行所 大阪東區谷町四丁目
振野大坂七四八一三 中央研究會雄辯部

天満赤壁 大阪市北區 滝川町天満天神
大人用 高井藥店製劑部 表門ヨリ二丁東 辻角
小兒用 是をほきききききき
はいた等 口の中諸病によし
各地藥店 取次取賣ス
定價大人小兒 各 三十錢 五十錢 各 五錢

創立八周年 世間に有りふれたる只一種の電氣治療とは違ひあらゆる高級の新式機械を取揃へ設備完全總ての難病全治へ貴客に應ず

高田博士新著

『半峰昔ばなし』を読んで

市島 春 城

高田博士の「半峰昔ばなし」といふ本が出た。自分はその草稿を一々讀んでそれに感服を述べたわけであるから、その草稿を讀んだ事にはなつてゐるが、然し完本になつてからは未だ讀んでゐない。然しそれは草稿で讀んだのと異なる所はない筈である。たゞ出版された本は大部なもので、最初は五百頁位のものかと思つた所が上梓されて見ると七百頁といふ大きなものになつてゐる。先づその體裁を見て誠によい心地がする。

一體半峰君は事蹟の豊富な人であるから如何かしてこの人に自分の自叙傳的のものをあらせたいと考へた事も多々であるが、何しろ君は仲々多忙な人で、筆に就かぬ時間極めて少ないので折に折に自叙傳を勉むる事なほ勉むる事もあるが、かつて聞入れた事もなく、「自分の如き貧乏な體裁なぞを説くべきでなく、且は兼不性だから若し僕が君より先に死んだら君が筆をとれよ」などと常にいはれたのである。それは坪内君と共に勤めて漸く自分の體裁を磨くといふ事になつた。然し前いふ様に常に忙しい人であるからそれが續けばよいが、實は内々氣遣つてゐたのである。所がやつて見ると案じた程面倒でもなく、ずん／＼進んで僅かにこの一冊が完つたのである。今から考へると善くも此位大きなものが僅かに印刷出来たかと自ら思ふ位である。

この「半峰昔ばなし」と題したのは博士の自叙傳ともいひ得るものである。然し乍ら君は之を自叙傳とせずして換言すれば傳の體裁となさずして長い體裁をアネクトドト體になされた。いはゞ一種の隨筆の如き體をなして興味を本位としてその體裁の重なるものを懸つてゐる。従つて自叙傳としては随分逸した事柄が多く、然し第三者の讀者としては興味がある。普通の所謂自叙傳的なものにおいては、見聞興味のあるもの計りでは書かれず、往々にして人をして感服を覺せさせるといふ事があるが、この餘り易い點から巧に避けられた。君の幼年の頃から今日までの六十有五年の間のことを主に興味ある事實を中心としてその折、その時々々の事を書かれた。其所に隨筆の者をして喜んで殆ど巻を閉づるに導かぬ妙がある。君はいふまでもなく、大なる弁舌家にして單に演壇上においての弁論の雄たるのみならずして座談においてもまた一世の雄たるを失はない。この書は博田氏といふ早大に生れた文學者の筆記になつたものではあるが、然し君の談話を筆記以上に善く寫してゐる。殆どその口吻までも全然そのままに表してあるのだから、これを讀めばさながら君に接してその談話を聞くが如く、ラヂオによつて君の話しを耳にするが如

きものがある。従つてその意味においてどの點も善く活動してゐる。この本に接して先づ愉快の感と興へるのはその點にある。唯自分の事はいひ難いものであつて、やゝもすれば自分の功績をてらうが如き感ひも起るものでそれを避け、謙とするといひ足りないかの如き感も起さしむる。これは蓋し自叙傳的のものを書く場合に於いては止むなき事と思ふ。然らば本書において欠點は何所にあるかといはゞ恐らく「いひ足りない」といふ點であらうが、そのいひ足りない所に著者の人格があるといはねばならぬ。全體この著者は頗る多方面の體裁を持してゐる。その大學時代に於いては天眞に文學才があると見られ、認められた人であり、後に西洋の文學に於いて大なる天才があると認められた。即ち早く西洋小説に接した。或は西洋文を結構無難に書く等の點に於いても同感は勿論、先賢をも學と云ふものに導いたならば、今頃を得たはずの必す大なる文學者といはれて居つたであらう。又君は壯年の頃に既に政治に興味を持ち、其の初期の議會以來衆議院に議席を有し、憲政の爲に大なる氣を吐き、遂に野黨の爲に傷を負ふ迄に到つた。政壇に於いても成功した人であり、又夫れを續けたならばその道に於いても大家といはれたに相違ない。然し君は教育の爲に文字も政治も悉く放棄して四十有五年の久しき間全く教育のために没頭した。早大が發展し今日の如き大なるインスチテューションをなすに至つたのも全く君の力になるもので、之がために君は飽ゆるものを犠牲にした。君は又多方面に能力のある人、且君に驚くべき才能のあるのは、君の體裁を細かに書かば明治時代の文學にも、爾れ又その他の美術、工藝等にも、爾れ日本憲政の初期の大切な時期にも、及び又は教育事業に關する事は勿論、遂に君は風々官途にも就かざるを得ざるが如き場合に立ち至りかつては台閣に列した事もある、之等の各方面を遺憾なく書くといふ事は到底これ位の僅なるものに書く事は出来ない。たゞ謙遜なる君は、即ち第三者が讀んで興味のある、即ち君が讀んで興味のあるといふものに限り話しをさせてゐる。殊に自分の敬服する點は交る人々に對しての心算である。物故された人々の逸事、如きことを極めて親切に随分多くこの話の中に収めてある事である。この物故された人々の内には君の談話を稱りなければ世に知られない人々

もあるのであるが、君の用意の如き所までも及ぼされてゐる事は、自分の尤も感服する所いふまでもなく君の人格の然からしむる所である。私は特にこの著書について他人よりも非常なる興味を覺ゆるその理由は博士の履れた體裁が自分のそれと多く同じくする點である。従つて君の體裁は自分の體裁に解れて來るのである。之れを讀めばさながら自分の體裁を見るが如き感ひが何となくあるのであつて、この一段は到底他人の味はひ得ざる所である。然し夫れは君と同志であり、同路であり又事を共にしたといふ自分だけの感じであるが、恐らく左様な關係の他の人々においても必ず之は興味を興へるであらうと思ふ。その理由は、第一君は一種の批評家である君の種々な事を評するに必す其一家をなししてゐる。君の觀察なるものは一種の體をなし、世人の口吻をしてをらぬ例へば、君は西洋へ遊ばれ、長い紀行の如きもその一例で、近來西洋に遊んだ人の紀行文も多々あるが、多くは用人を異にして同じ事を説いたに過ぎないのが少くない。然るに君の紀行は君ならぬは出来な一と思はる。觀察をしてゐる、これは一例に過ぎぬが、兎に何事についても君は觀察が甚だ面白味があり、且余り面白い理窟をいはずして人をしてその心底に觸れしむる妙がある。近來種々な人の傳記も出來てゐるけれども、是程多方面にわたつた、興味のある、體裁は恐らく他に余り類がないであらうと思ふ。

一體自分が平生思つてゐる事ではあるが、著述なるものは、その人において頗る大事件である。自分の著述を世の中に公にするについては相當の暇も、相當の努力もいる。例へば丁度一人の子供を設ける様なものである。人が子供を設けたといはゞ必ずての親戚故舊はいはずが、人々は之を等しく祝ふものである。と同様に著述もまたその完成された場合には人々は之れを祝ひ喜ぶといふのが人情であり、著者に對する體でなければならぬ。然るに日本においては子を擧げた時には祝ひ喜ぶが著述が出来上つても多くはこれを閑却してその著作の廣告が世間に表れてもその勢をかれこれといふ者もなく、これを祝する者もなくやゝもすれば折角その物を知人に贈つてもこれを批評せず甚だしきに至つては受取りの通知さへもいはざるが如き殆ど例となつてゐるが、如きは常に自分の體裁する所である。斯様な弊は之を矯正したいと考へてゐる。この著述に對して君の體裁を知るといふ事は少なく、共早稲田の幾方の縁故者、君と共に政治に興つた何万といふ友人知己その他幾多の人々は少なく共一讀するだけの因縁があり又君の如き多忙な人に斯様なものゝ出來たといふ事を君に向つて一應の挨拶する者の當然あるべきであると思ふ。自分の如き體裁を共にしたといふ者なぞは別して君の體裁が斯様な體裁たるものを産出すに到つた事に對して万端の喜びを衷心盡し得ない。

つてもえに井工

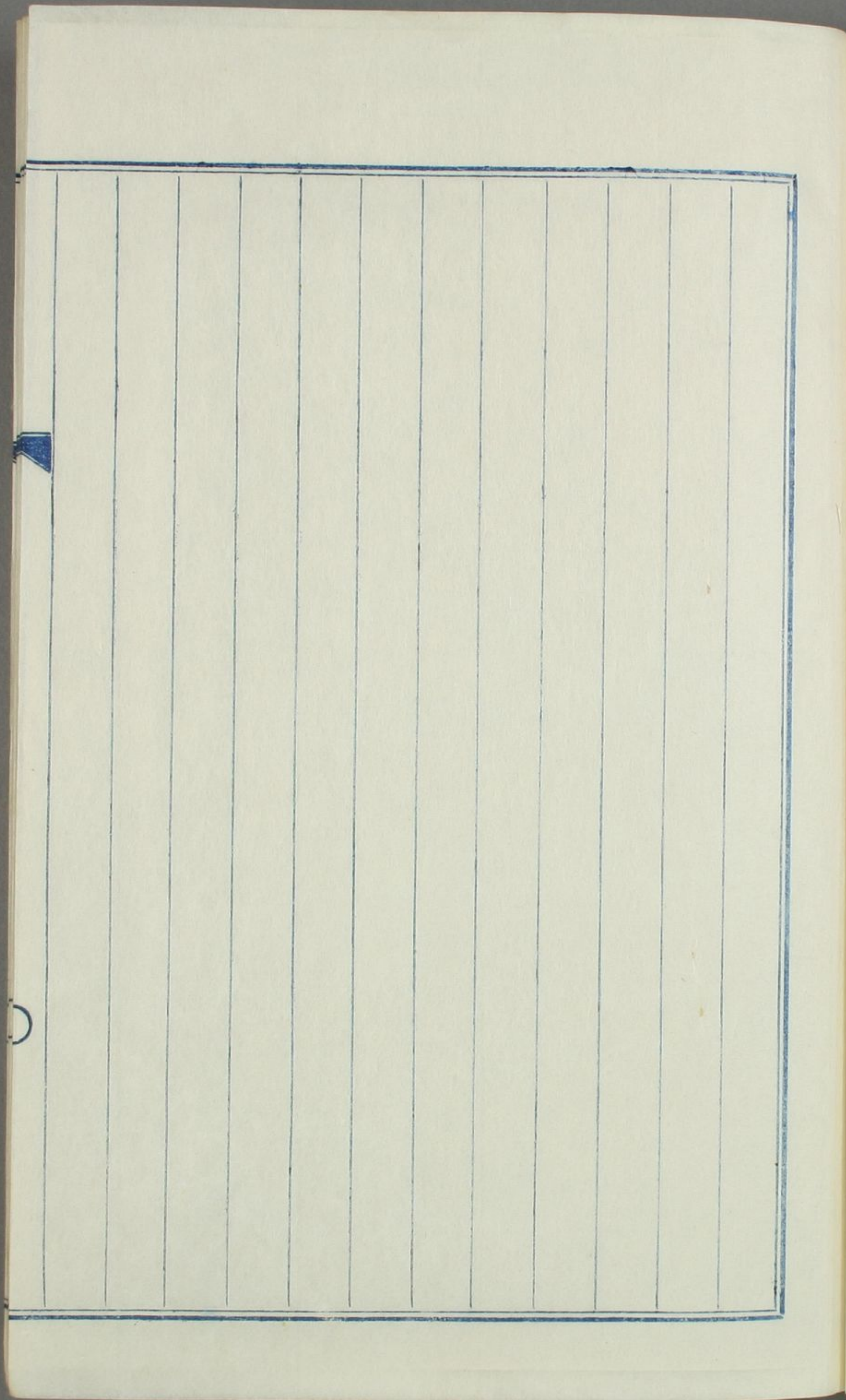
（時の鏡あり）
今も伏せたる状の井細工

の花入、風改のあるをよろこびまを、家甚じと
と購ふやうしに流石に京都の分りなきがある。
あ致味の自合に京都へ入るとこころのなすはし
をすることを禁に得るのがある。雨あらしと動
かす降の日、終念におそろく起きまら、訪ひ来る人
ろく電入るき用かるきを幸ひは報らる酒を
始め、本家の井市、産のあるを全郡戸を午後
の三時のまに飲ひつけたるも一息のあつたが旅念の
せや婢の扱の酒量がある、終日酒のお手をし
て保まらるる他の地は因縁の見ぬことか
石ノ心氣ある土地柄地けある、飲ひつゝあつた

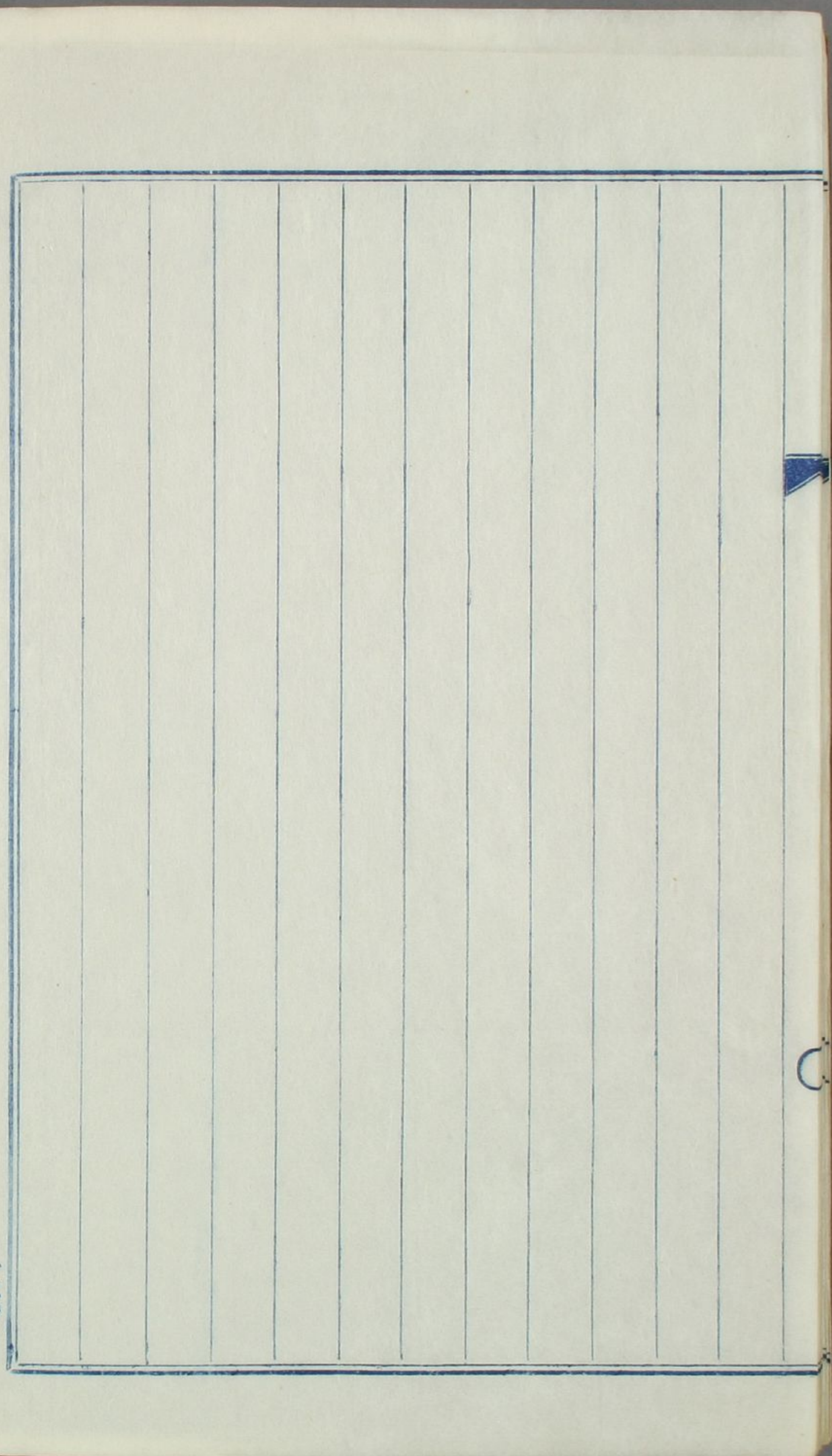
女流を自動車に載せ雨の中、名山を浴びたの
心、くく、敗つたあつたが、瓢箪を訪ふのは
成印であつた、何あかき等の外、一穴もさ
付ひる旅念の娘をお手入る、若者の若あつし
頃のばあしをさかさん、娘の自を感
てあきりな次きをく、さかさんとするの、さ
あいつから、因り乗り、往々言ふまじきこと
を口走る、酒も追々執し、いつかの口も若ん橋
婢が手燭や古風なる、燭を所持軍び、燭
こゝを照らすも床しく、且雪洞手燭を店中
の主格の上、置き、其走りの池に映する所
を又せると、六時は元つての好下柄、何となく

四十年前の身政往：漸るる若の返つれ
繁日もうつれ。翠神如視世に満ち
返の快の快いあまけんも、翫の味
辛の代酌閑淡するをと思ふ
のこも風流の地に在るに宣いかまき
の抱の浦和せぬ。無海庵の山好
かつて其の庭の風快の一端を大隈
えにこともあつれが、翫亭に未
て見るべきとて、遠が又考へ出し
し。成るもろが自在の地丈は、瀟
か二方と別れておのづから風政を
観向のあり。別く人工を加くす
野の故を存

す。女はうもた公の面目が惚
れ。



十二行



○初に今次の關西行に荒し候合の事候得月橋の一面
をえと動し此而し木ノ郷のをとり白帝城をえりこ
とい故て動さううりて而し幸ひなるありと果し
得月橋の以外に休合のありて所謂日をうりての
跡と就てい前と大略を叙し此に得月橋の概ハこ
こに録し置か候なりぬ此橋の余が幸大なる時
代に初めと候内道邊に招かれし所也西暦
五十年を經るに今も其橋名をこゝに
以て名古府の上表也而しゆと事あるに今も其の
橋の消息を傳へたに上表也といふ事あり名古
府居持の刻意也其の跡を問くハ七との
事ありと云ふ山陽地志の類ありと問くハ在

是を余も余もよく扱思動く但此詠田中一時を得
るや否やか洲疑河より幸ひうらりんをえれ
る其夜小山杉壽を東道にて爰に利るを得る。
當日の余の日記に曰く

余ハ小山と共に彩雲閣を辞し丸皇電車乗
り帰途に孰く生憎余中電車に故障を
生じ定刻より三十分後を柳橋に着
時七時を過く橋ハ柳橋を隔つ僅く
了洋の電とあり小山と此にあり列
車館といふ案内さる別館の道を隔り
母屋の前を近年新設する不
へと構生新しく片心地下然れも余の目

的ハ母屋の在るに在らざる也此ハ片山
利ハ河川也後者ハみの誠也を招く片山河
川直下なる長谷川ハ京都に赴いてある
余酒次飛つて甲、余ハ帝大に生ずし時一
年暑中休暇に之友三山格也(帝大)と三十日
の遊りと與り、名長屋の着の日、ゆ着中の
坪内道忠を海島の兵に訪ふ、母路ハ今ステ
ーミソンの在る也道忠余等と待りて
別り路の即ち此橋也、屋指す人に既ニ二十
年の舊に属す、吾人亦免れりと歎せざる
然らず(小山は曰く五十年前ハ吾人未だ生んが
と云ふ)今日の園々も七木曾川の沿岸也今

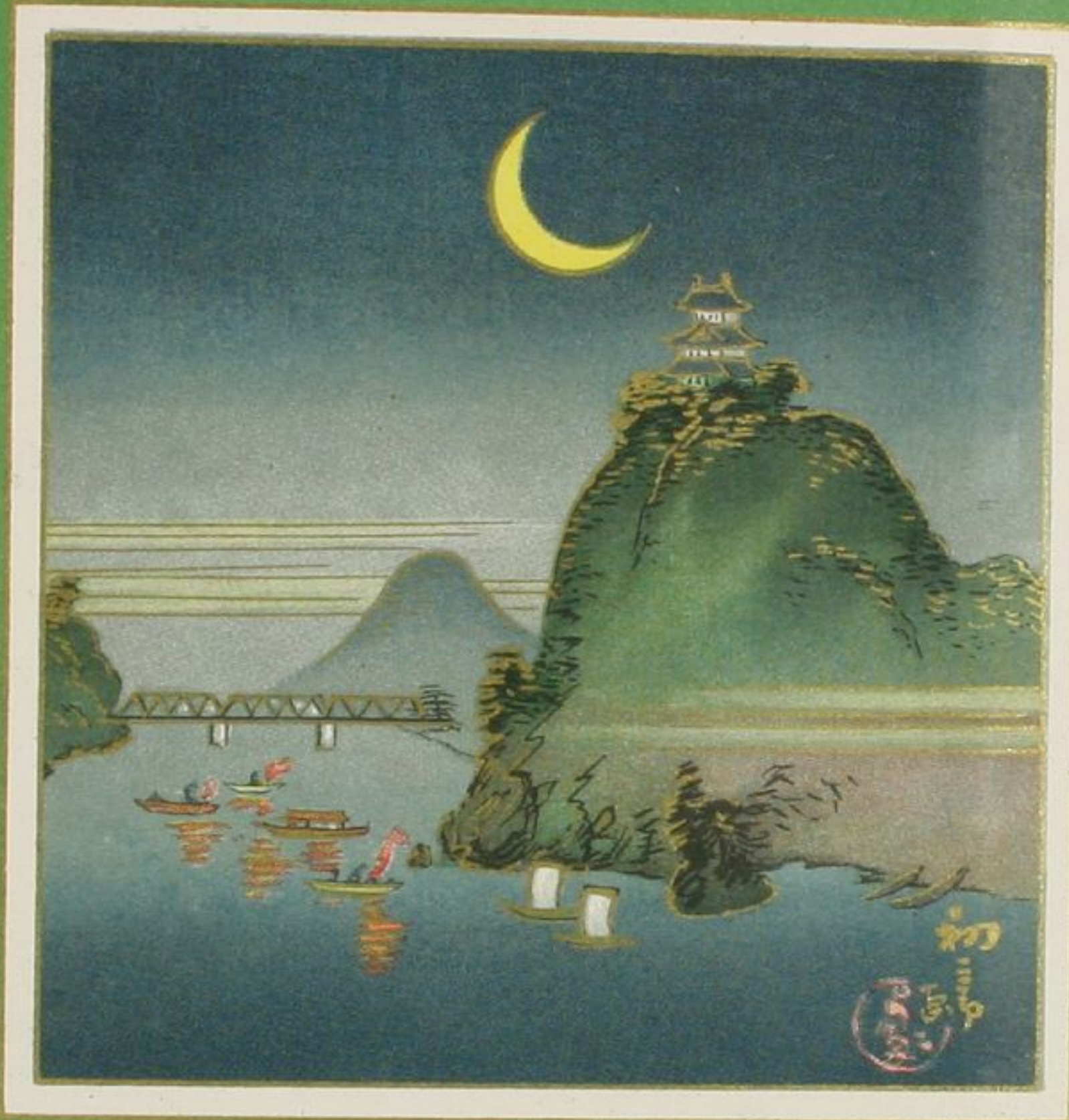
湊に至り一橋を跨ぐ。忍川の間に太田の庄を
望み、太田の庄の道邊の舊里を即ち
是生誕の地なり。而して同日此橋に來り、
縁といふ坊に於て、次人や此行の道邊の紀念古
業の爲め、此橋に於て事業の以てん努力
淺からず、此橋に於て、好紀念なり。
余は道邊に代はるの意を以て、此橋の古きを橋
人とす也。と一時、階表に於て、席上大眼を古
しと述ぶ。道邊に於て、母家に客の敷す
るを待ち、主婦に誘はれて、別り、先づ浴を各
室に見る。序の橋上、余の舊記、橋に於
て、山陽押上を、得月橋の額を掲ぐ。余は

婦に別を曰く、往年來りし時、細き河あ
りしと記、橋も今大なるなり。の主婦乃ち
一方の戸を開く。見下を、眼下に川あり
多くの船舶、集し、月の中、天に輝いて、光
の映り、余手を拍つて曰く、得月の二字、
しかる也。と、静かに、額面の、觀後を讀
む。曰く

辛卯仲秋書、西在為橋主人、林六
嶺也、子成

とあり、往年、女辛卯の談、語るを讀む。皇
也、あるなり。これ、由り、由り、由り、此の
扁額の由来を、略々、知ることを得たり。辛

の傍を、柱もろびり、古も茶のうら、
轉れば



内景御イラ本日

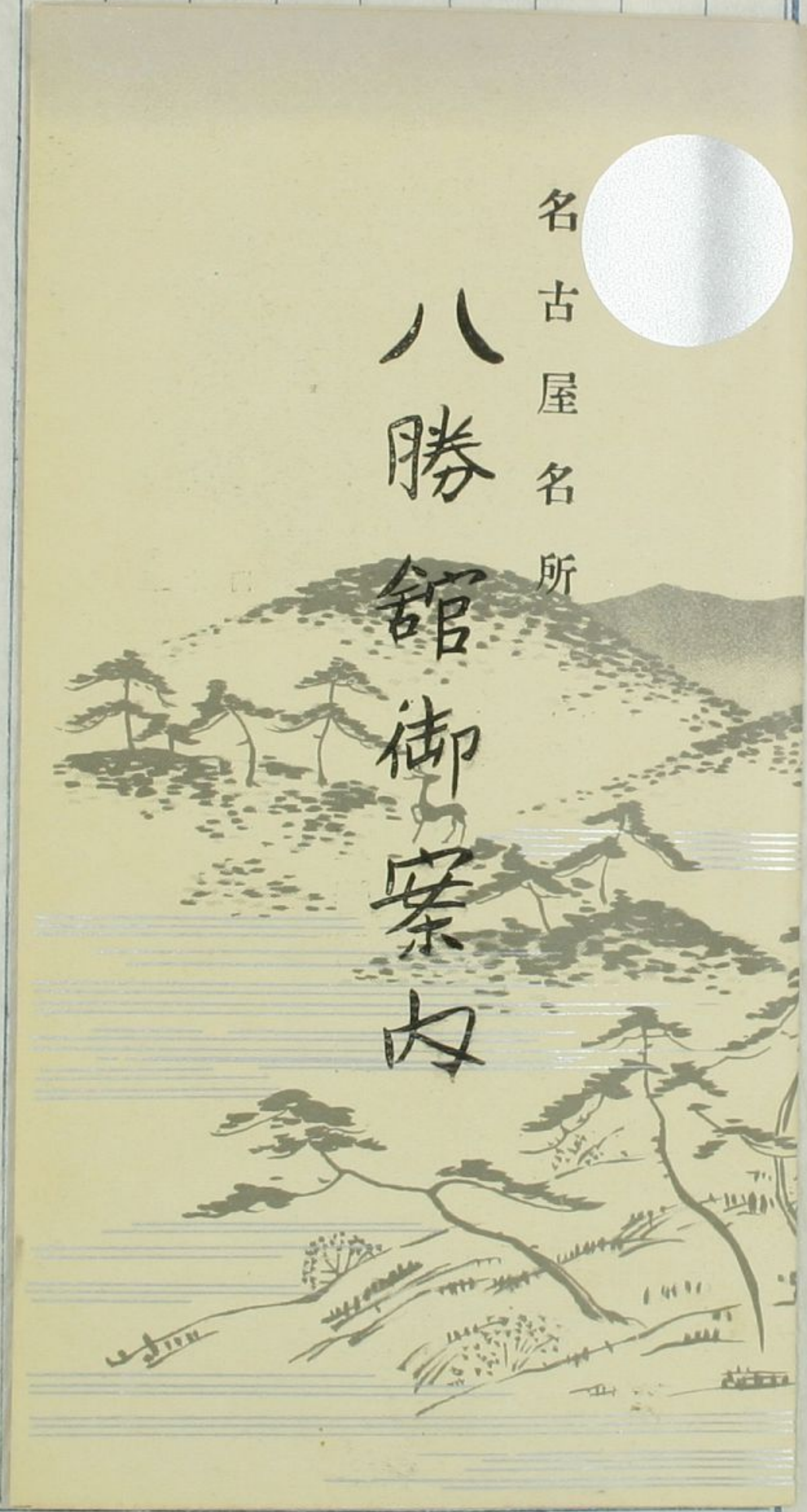
GUIDE TO
THE RHINE OF JAPAN

外天保の干支也。西在に有すとあるは京都
の自定に依りて有し。此家にも有し。是れ
らてくることゆゑ。尚細川忠家の囑に依り
書し。なること也。但比得月の二字あり
山陽の命し。所さうや。未だ家にも判
し。難しと果も。仲秋とあるは。其地
を多き。恰も。多月。其地を映すこと
を。語らば。思ひつ。此名を命し。未
だんを。揚名と。志す。あ。歎。梅を下つ
て。室のニッ。連。交。到。五十年前の
記。臨。に。新。ま。に。と。叫
ふ。を。ま。一。回。嘆。き。出。す。に。ハ。南。時。を。大。勢。に

舊の念を切らざるの如く、別館に戻つて又能く
 史の傳あくるを知らず、酒次ハ山の邊に此橋
 の表の如く、山君の愛慕する所、山君及後此
 家を去つて別館に生れし、此橋を去るを言ふ
 づか、進年、及し、此橋いよ、進年
 との縁國のみ、あつて、へし、余、
 一、笑す、
 昔、来りし時、を、殿、か、自、慢、の、神、記、が、あ、り、に、か、今、の、他
 店、を、委、し、と、あ、つ、と、ま、ぬ、の、ま、た、此、家、の、評、判、の、時、某、の
 淡、柏、の、あ、つ、と、五、六、程、出、た、の、を、試、食、す、と、味、曾、淡、の
 大、根、菜、も、の、今、も、余、の、郷、里、の、ま、あ、と、同、様、ひ、あ、つ
 たり。

名古屋名所

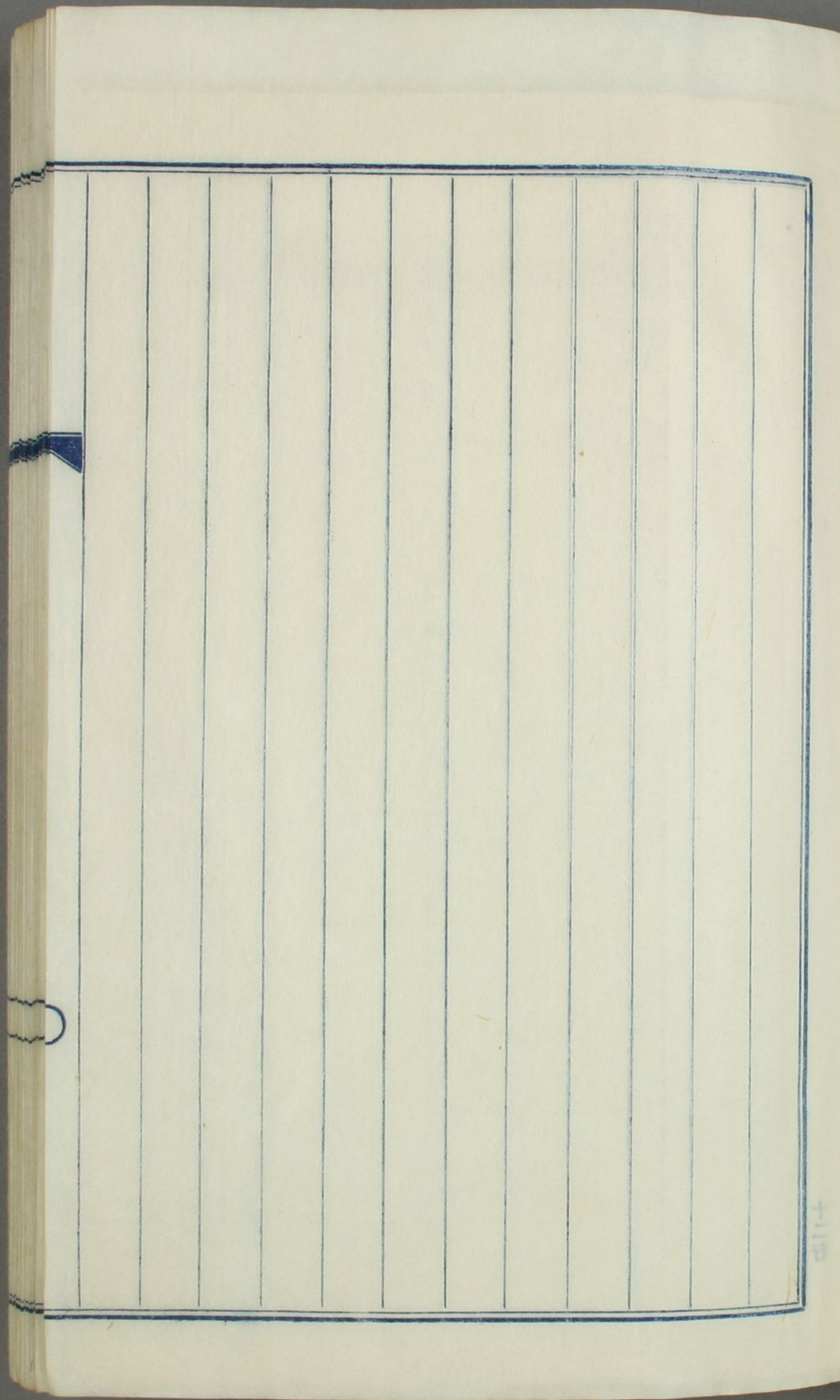
八勝館御案内



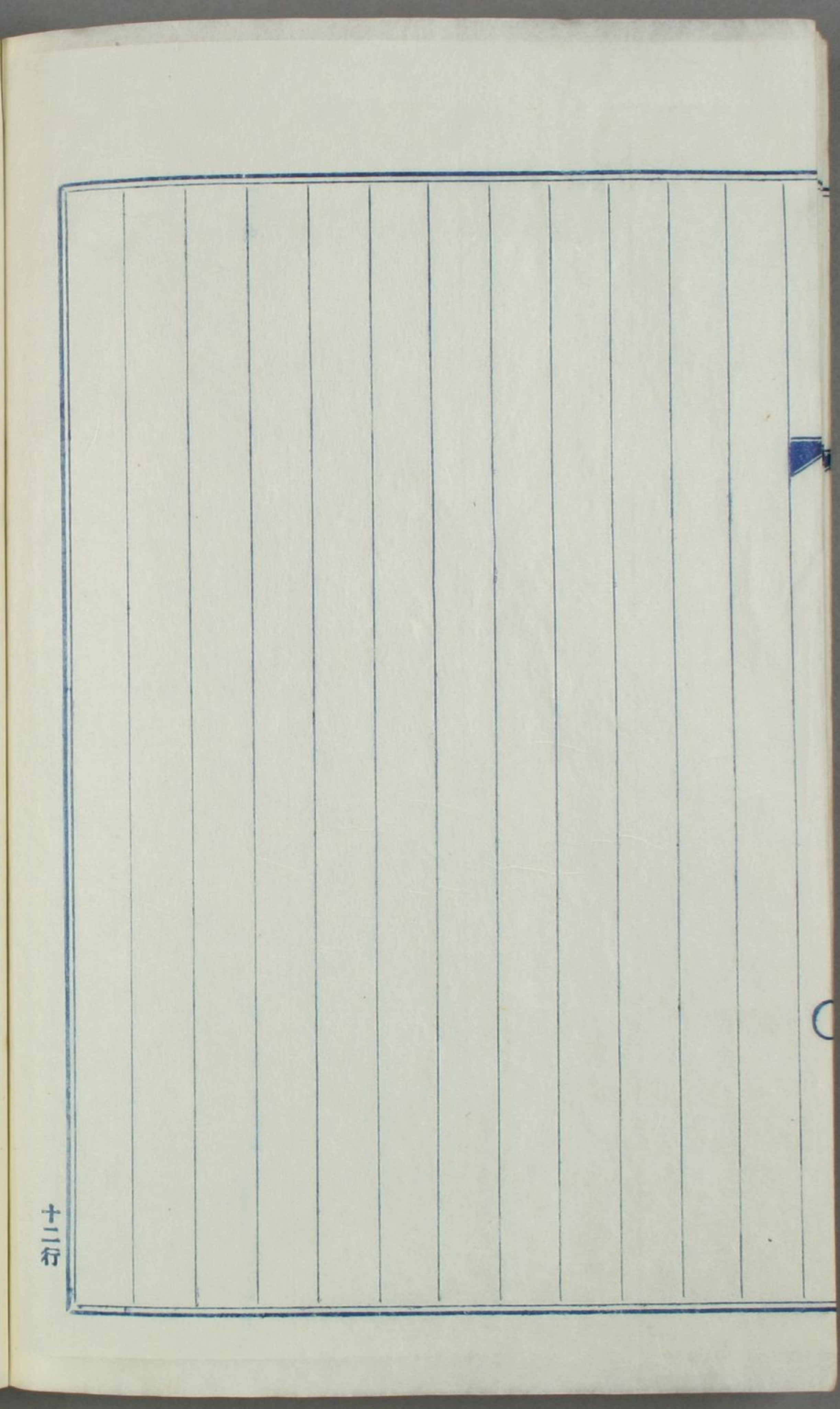
○今頃流中ニ投宿しつハ勝波、名古屋の名跡とい
敷くところ所多、東京の紅葉館もその名を以て名
古屋市ノ東郊ニあり、今ハ電車ニ通ずるも名古
屋の跡ニテ一レニシテ五十町を隔つ、自動車ニ乗
疾走約三十人を具す、此地も名古屋ノ名蹟名所
圓金ノ音ノ山ニ記せん、眞正寺といふ眞言の
寺ハ尾張屋の建之に傳り、ハ勝波ノ隔地ニあり、
丘陵ニ上つて見れば富士外群嶽を仰ぎ又伊勢ガ
湾を兄の眺望あり、ハ勝波ノ表地也、昔
弟四ノ子とて、えり、ハ勝波ノ表地也、松
と名付村と錯綜自れノ故と爲す、昔々
紅葉見たり、松萩ハトテ萩松と記す、ハ汽

車ノ所也とも見たり、ハ勝波ノ表地也、
地域ニ建てるん、大小の室ハ或ハ高々或ハ低々
く、日房河ガあるハ茶室もあ、皆廊下を以て、車
路す、方地も見るんハ、能ハ江ノ如し、各室ノ結構
も風ノ流るを依て、書畫ハ頗る見たり、
この寺、吾んハ前ノ橋中ハ甲ノ別荘ニ別り、前
年経是トナ、今ノ際見レ、切待せし、を裏切
んと、此河ノ流る、名古屋ニ来り、其地ハ所
も取五丁、此ノこと、ハ勝波ハ
どこにも、自然ノ風趣を本々、技巧を弄せ
たる所也、吾んハ、得る、橋女、其地ノ故
ハ、未應を、名古屋ノ材木、高田某上

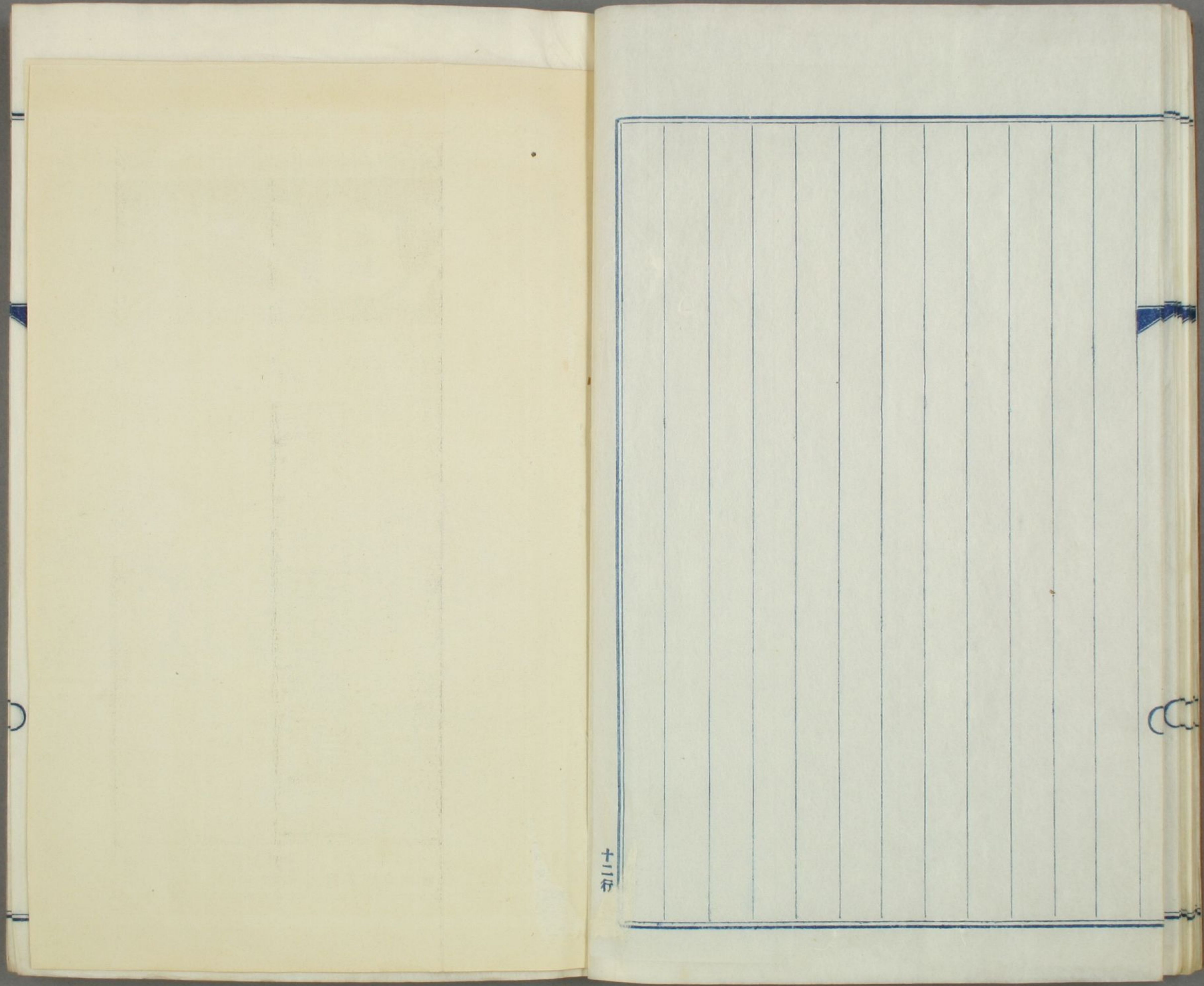
海に巨利を得て、此地の恒産を志し、最初三百五十日
を以て此地を購ひ、刺苦穉樹を植えたるが如きの
一時人の何をも為す事と笑し、終るるに及ぶ
畢生の力を以て漸やく甚く謝を築き、其の
母即ち此後より、後世の補修を加く、新屋
も添へんとす、大休の築田の視畫ともつくる
一時持統の困難を感ずることあり、終る株式組
織として千秋樹を信尾院の女同恒産とす
ころと漸やく運命をひくる事あり、今の女将は信
尾の末三女として三河の人より、寢里料理皆在云
も念心あるに、若くは在りて閑静なること也、余
此家ニニ又たし、歎る愉快を覚へたり

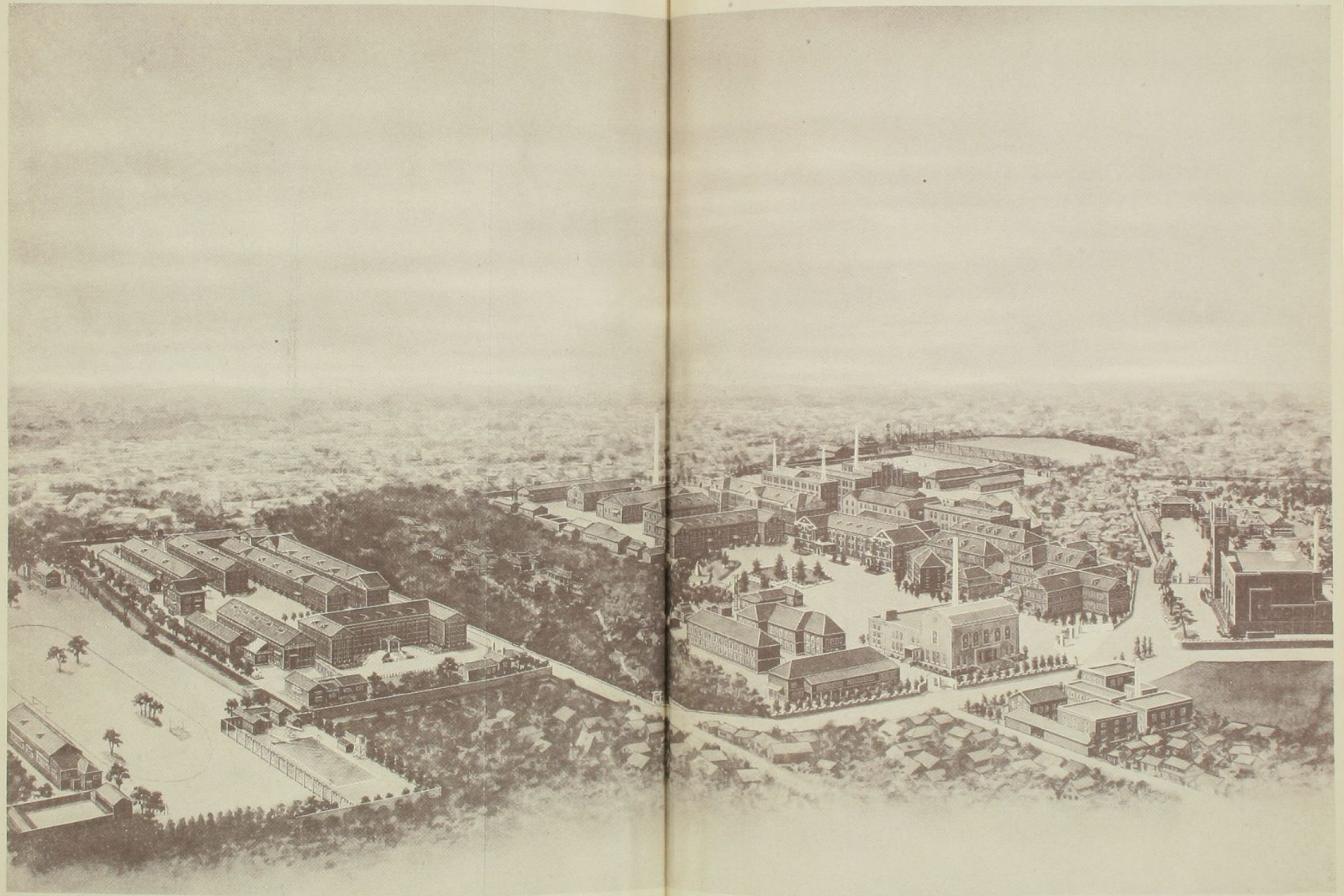


十二行



十二行





早 稻 区 學 園 全 景

(71)

早稻田大學の今昔

るが、侯の精神は長へにこゝに籠つてゐる。其の鐘樓より

それに始終観音高く演壇上をあちこちと歩き廻り、チョリ
 持った手を揮り立て、の講演振が一種の波瀾を作つた。
 學生らの注意を惹き、決して倦ましめなかつたのであつた。
 大抵の學者は、抽象的學理を説くには、抽象一點張がきま
 りなのだが、君は、論理學の場合にての如く、何學を講ず
 るにも、抽象論と共に具體例を、分析と同時に總合を忘れ
 なかつた。理性に訴へると同時に、想像や感情に訴へるこ
 とを忘れなかつた。證例や比喩には最も苦心してゐたらし
 かつた。併しそれが出來たといふは、君か一面純文學の素
 養なり蘊蓄なりが豊かであつたからである。
 君のさういふ特長は、其後數回、君の教場外に於ける公
 演を聴くことを得るに及んで、いよく明かに知ることを得
 得た。

本來私は氣短かで、早口で、獨り合點の癖があり、人を
 教ふるに當つても、とかく以心傳心式に、單刀直入に直覺
 に訴へて、専ら比喩か何かで簡單に暗示して、それで済
 だ積りであるといふ風であつたのだが、君の教授振に感
 して、分析と總合、抽象と具體、理論と證例とを併
 して、啓發することの必要を悟り、力めて持前の弊を矯め

早稻田大學の今昔

(式典に列しての所感)

市の海女

都の西北早稻田の杜と歌ふ、其地にて偉人大隈老侯が長
 く住はれたので、世界知名の人は皆な侯を訪ふ爲めに爰に
 車を軋らせた。昔し羅馬の盛んであつた時、世界の道は
 羅馬に通ずといふて誇つたが私も其輩に倣つて世界の道は
 早稻田に通ずると云ふたことがある。此早稻田は四十餘年
 前に茗荷の産地として青物市場にのみ知られた田舎であつ
 たが、今は世界に聞こえる著名な地である。不幸今は老侯
 を失つたが、老侯の主唱で經營された學府が巍然中外に雄
 視してゐて、世界の通は矢張りこゝに通じてゐる。

學府は四十五の齡を迎へた。そして記念の式典が擧げら
 れた。其式典は學府の恩人大隈侯を永く記念する爲めに築
 かれた大殿堂の中に擧げられた。既往に無い意味深長の式
 典であつた。侯は常が此様な大會堂の建設を冀望されたが
 それが侯の生前に於て果されず、其薨後侯を記念する爲め
 に出來たことを私は悲むものである。併し此の會堂は確か
 に侯の英靈を慰むるに足るものである。堂は輪奐の美を極
 めて、五千の大家を容れ、地下にも二千を容る、巨室があ
 る。侯の大演説をこゝに聞かなかつたのは千秋の遺憾であ
 るが、侯の精神は長へにこゝに籠つてゐる。其の鐘樓より

打鳴す鐘は侯の高遠なる理想を寓するものである。

吾等は式典に列し、五千の大衆を眼前に控へながら、冥想沈思、無量の感に打たれた。吾等は今更ながら老侯を思ひ浮べざるを得ぬ。又學府の創立に功ありし小野梓君を始め、物故された幾多功勞者を想ひ起さざるを得ぬ。尙吾等は思を學府創立當時に馳せざるを得ない。四十五年の舊に溯れば、私などは廿三四歳の青年であつた。それが創立に與り又教鞭も執つた。當時高田總長を始め吾等同窓教授は妻もなく子も無かつた。それが妻子のある老生に對して教へたのである。現に私の教へた人に岡山縣の縣會議長のあつたことを想ひ起す。當時の教場は老少顛倒で一種奇觀を呈した。今考へれば如何にも滑稽であつた。其の頃の學校は東京専門學校と云ふた。校門の前、大隈邸の側面は満目水田であつた。學校は木造の講堂が三棟ばかりあつて、如何にも貧弱のものであつた。後に大講堂が大隈侯に據つて建られたが、これは煉瓦造りで千人を入れた。不幸大震災に崩壊したが、當時吾々は此講堂を誇りとしたものだ。すべて講堂は門内の狭い平地に設けられ、背後は高い丘陵であつた。後に其丘陵を平けて、其土を以つて門前の田を埋め、學校の敷地が今の如く擴がると同時に田が市街地と化したのである。それまでの早稻田は寂寥たる村落で、飲食店と云へば、堀部安兵衛に縁因ある列の蕎麥屋の外は無か

す僅かに十圓にも足らぬ車代を拂つた位だ。存在してゐる帳簿に就いて見ると今の内閣大臣中橋君に五圓の車代を拂つたとが記されてゐる。學校が如何に貧乏であつたかその一端で知れるであらう。當時蛇蝎の如く思われた高利屋平沼專藏のお蔭を蒙つたこともある。その借金が終に寄附されたから實は平沼は學校に對する最初の寄附者である。斯る困難から脱したのは開校後七八年の後である。そして今は歳計百三十餘萬圓といふまでに太り、大學令に基き文部省に百萬圓を預けるまでに進んだ。尙土地に付ては學校は久しい間尺寸の地も所有してなかつた。學校の敷地すら長い間大隈家のものであつた。而るに今は八萬二千坪を領するの大地主である、天下に聞こえる名園大隈侯の舊庭までが今は學校の所屬となつた。教授や學徒に智識の糧を供給する圖書館のことも創立の頃は勿論無つた。但し圖書室と云つても負弱なる藏書があつたに過ぎぬ。その後圖書館が出来私がい間其館長であつたが、學校の發達につれてそれも不充分を感じたので終に今の新館が設けられ藏書の数は三十數萬冊に達してゐる。尙又卒業生は創立の頃は僅かに十人二十人を出すに過なかつたが今日千人以上も出すに至り、追々累加の狀勢である。現に校友の数は三萬人に垂んとし、それ等は多くの社會に樞要の地位を古め衆議院に議席を有するもの丈でも五六百人を數へ、閣員に列したも

つた。學校の隣地には子規が啼き、狐狸が白晝横行した。其頃を追想して今の鶴巻町あたりの繁華な市街を見ると、眞に桑海の感無き能はずである。當時學校の建物は寄宿舎までも入れて十棟は無かつた位、今は恰度百棟を數へる大建築がある。當時の學生の数は開校三四年の頃でも千には満たなかつた。教職員の数も三十人位しかなかつた。それが今學生一萬五千、教職員八百といふ數になつてゐる。夜學に來るものだけでも七千を以つて數へ、薄暮の電車は日々祭日同様の雜踏を極めてゐる。又、學科も當初は單純であつた。文科の如きも初めは無つた。追々商科師範科が置かれ、高等學院や理工科が出来工手學校夜間専門學校などが開かれて、復雜の上に復雜を加へ、今は醫科の外あらゆる種類の學科が具はり、堂々たる綜合大學が出来つた上に各種の附屬學校も備はるに至つた、四十五年間の發展は實に驚駭に値する。

開校當時は經濟が不如意で大隈侯の補給を仰へても足らず、其月の給料が拂ひ兼ねて翌月になつたことも再三あつた。當時の月計は千圓にも満たなかつたと思ふが、それですら尙ほ如此であつた。當時專任教授の給料と云へば今の小使給にも劣つたもので、高田總長が最高の給料取りで僅かに三十圓であつた。多くの名家が田圃路を歩んで教へに來た。それに對しては久しく報酬らしいものが拂はれ

のもあり、全國の新聞には校友のあらざる所なく、實業官吏教員何んの方面に於ても校友は追々重要な地位を占めつゝある。體育の爲めの遊戲も早稻田のグラウンドはいつても武萬の大衆を以つて充され、切符がプレミアムつきで價が昂騰するの好景氣である。追つては菰窪と云ふ地に三萬坪の新グラウンドを經營する計畫であるのである。思を馳すれば際限もなく種々の事が胸中に往來して、今昔を比較すれば感慨に堪へぬものがある。四十五年間の早稻田大學の進歩發達も偉大であると云はねばならぬ。吾等も既に老いたれども、大學其物は今が働き盛りである。此先五十年の祝典を擧ぐる時には更にどんな發展を爲すことであらうか、時勢は漸やく私學に幸するやうになつて來た乃ち私學は民衆により支持さるゝやうな氣勢になつた。現に大隈侯の記念會堂も五萬五千人の大衆の喜捨により建設されたのである。これに依つて見ても國民が漸やく覺醒して、國費に據らざる私學に力を假さねばならぬと覺つたことが卜知し得らる。そうならねば大學は發達しないのである。世界のどの大學でも其の優秀なるものは官立ではなく皆國民の支持に據るものが發達してゐる、私が五十年の祝典に大いに期待する所あるは決して空想ではないと信ずる。



集古

昭和二年丁卯十一月發行

蕎麥の昔話

浅田 澱橋

九月の例會に、近頃大阪で出來た、蕎麥の事を書いた本が席上にあつた、一見立派な厚い本であつたから、内容を一瞥したが、參考になるやうな事も見當らなかつた、またこれよりは京都の河道屋安兵衛の編輯した、蕎麥誌が簡にして要を得てゐると思つた、散會間に三村君が林君に向ひ、大阪で出來た蕎麥の本を持つて來られた方があつたが、御覽になつたかと問はれた所、林君はいへと言はれたから、自分は横合から口を出し、左程面白いものではなかつたといつたのが動機でついお喋りしたら、林君は大分傾聴して居られ、それは面白い何れも初耳だ、今の話でよいか是非集古へ書いて呉れと望まれ、三村君も、要點を一寸／＼筆記したがさうしてくれれば結構だと言ふので、誌上の餘白を塞ぐ氣になつた、既に先輩の書き残された事は、蕎麥誌其他にも載せてあるから一切省く事とし、唯自分の幼時より見聞した事のみを追思つて書き綴る事としたのである。

自分の生れた家は、武州中野の浅田甚右衛門で、屋號を浅田本店といひ、代々穀類が本業で、蕎麥挽拔の元祖である、自分も十歳以後は寺小屋から歸ると、見世へ出て小僧代りをして、仕切りの金の持ち運びをしたり、或時は父の懸取廻りに手控帳包を持たせられて供をした事があつたが、當時の懸取り定日は毎月八日を

振出しに、十二日・十三日・十四日・二十日・二十八日・二十九日・三十日（後には五日・一日を増した）今と違ひ乗り物がないので終日徒歩で、北は吉原、南は品川、東は本所、深川のはてまで、はつゝき歩くのであるから、眞夏や雪の日は商賣とはいへ大人でも随分難儀な仕事であつた、小供だから雪や風雨の日は供はしなかつたが、終日の歩き詰めで家に歸ると足は棒のやうになつてしまつた、其頃は成子の木戸際（今の浄水工場表門の所）から新宿の追分手前までの所謂五十人町は、左りは茫々たる草原の矢場で、右は津の守の下屋敷其他の取り毀し跡で、時折り追剝が出るので、懸廻りには日の暮れぬ内に、屈強の者を四谷大木戸まで提灯を持たせて迎ひに出したものであつた、其満目荒涼たる五十人町が、五十年後の今日は、土一升金一升の熱鬧地となり、新宿驛前の如きは、地所一坪千何百圓の賣買と聞いては、眞に今昔の感に堪へない譯である。話は再び前に戻り。偕て當時は一般に商用で出る時は、雨合羽は着るが羽織は着ない習慣であつた、自分は十五六七歳から亡兄の支障ある時は代りに懸廻りに出たが、集めた札を胴巻に入れて腹に結ぶと、蛙を呑んだ蛇のやうな恰好であつた、今考へるとあれでよく巾着切りにとられなかつたと思はれる。大分前置が長くなつてすみません、これから蕎麥の話に移ります。

自分の生家で蕎麥の挽拔を創めたのは、寛政の頃と聞いてゐる、然るに江戸市中蕎麥切りの記事が、寛文以後諸書に散見しますが、これはうんどんではないかと思はれる、若し蕎麥切であるとすれば田舎式の挽きぐみ粉であつたのです。自分が幼少の時、見世で勤めて居た挽拔職人に、能登七尾在の生れの者で多吉といふ老人がありました、其男の話に初めて國から出て来てお世話になつた時分は、挽拔蕎麥は黒粒が半分混じてゐて、穀蕎麥五斗入四俵を挽上げるのが一人前の仕事としてあつたといひました、（後には五斗入二俵を挽き上るを一人前とし精製となつた）其半黒の挽拔でさへ、上等の蕎麥屋ならではけ用しなかつたので、市中

の駄そば屋は穀蕎麥を買つて粉にしたので挽き潰しといふ。（商買手では穀そばを三角といひ、略して角といふ、夏角秋角なぞ稱ふ、文字は字劃の多いため△を代用す、僧家にてのササ菩薩と同じ）先頃吉田里子さんが松八といふそば屋の通ひ箱を會へ出陳されました、其蓋に御膳芥拔と書いてありましたが、芥拔といふ字面は自分も創見でしたが、考へて見ると安政前後のものかと思はれます。

話はちと横道に入りますが、彼の多吉爺の事で一場の笑話があつた、或時村役場から寄留の調があつたので、名字を尋ねたら、次郎兵衛多吉だといふ、次郎兵衛は親爺の名で、多吉は自分の名である、それでは通らない、名字を新たに附ける事になつたので、番頭の茂吉といふのが、多吉の妻が美代といふのを聞いて美代田とつけて届けた、それまで名字は無かつたのである、其多吉がなりが大きいので、近所で皆淺田屋のお相撲といつた、夏は仕事が済むと、赤合羽（維新前井伊家の御用達をしたので赤合羽が澤山あつた）に白雲齋シロウツサイの大きな前掛を締めて近所をぶらついた、例の茂吉がそれへ筆太に美代田川と書いたので、本統に相撲の様であつた、之れは明治八九年頃である。

それで蕎麥粉はいくら精製しても茹でると温鈍のやうに純白で無いのは性質の然らしむる所であるのに、穀に附いた土や目糠（小黑帯）が挽拔にしてもつき纏つて色のつくものです、挽拔の製法は最初に小そば抜きといつて粒の大小を篩ひ分け、大穀・中穀・小穀・おこそ（最小）の四通とする、其あとに残る塵埃は實に夥しいもので、一日小そば抜きをすると、三日位は土鎗のやうな眞黒な鼻汁が出ます、その四段に分けた穀そばを、最初は石臼の周圍に増し石を附けて挽き、段々と白を軽くし、ふるひ別けた黒粒は二番三番と順々に挽き詰め、ふるひ詰めて、最後に揚げ篩とて黒粒のないやうふるひあげ、千石に通し唐箕で颯つて仕揚げ九升楯で五杯計り俵にします、四斗五升入正味十五貫匁を定めとし、製造減りは穀そば一石（正味三十貫

夕)で挽抜六斗六升(正味二十二貫夕)出来るのです、挽抜屋に生れると誰れでも一度は此の苦しい味を嘗める事になつてゐたので、自分は十六の歳に一年やりまして、三人兄弟中一番心棒よく續けました、今ではモーター器械の力で目糠も土砂も摩擦して取り盡し、製粉が完全に出来て樂なもので、職工は勞資爭議の研究でもしてゐればよい様になりました。

昔はそば屋には板前出前持等と同じく、白屋職人といふものがあつて、それには顔役の親分があり、繩張り
が極まつて居て、随分やかましかつたものでした、白屋は挽抜四斗五升入一俵を粉に挽き上るを一人前としてあつたので、そば屋にはどこにも白場があつたのです、そば屋職人の人入れと云へば、先年芝居で助六の幕に出るそば屋の出前持のせりふに、誰の子分だといふのに、びなんとか、六間堀とか、芝居の所在地の繩張達の親分を名乗つたので、大騒ぎが出来、せりふを改めて和解になりました、たしか其時の出前持の役は松助であつたかと思ひます。

そばは穀のまゝ貯蔵すれば、十年でも二十年でも平氣であります、鼠の非常に好くものですから、二俵や三俵うっかりして置くと、皆喰はれ俵と穀ばかりになります、貯蔵力は斯く強いものですが、一年經つと香は失せ、臭氣がつき、肌が變色して段々赤くなり、長くなると、まるで蜀黍の様になります、挽抜に製しては長くは保ちません、夏場は虫がつき易く、それ故昔は寒抜と稱へて寒中抜に製したものを、上等のそば屋は前金を入れ、春先夏そばの出廻るまでの用意に、百俵貳百俵と豫約したものです。
世間そば通を以て自任せらるゝ先生方は、そばは田舎に限る、東京のは温鈍勝ちでいけない、色の白いは七難隠すといふが、そばだけは除外例だなどといつて、平氣で土芥を并賞せらるゝは笑止千萬である。そば切りは何よりも捏ねが肝腎で、でつちが硬たければそば好きの口に合ふのである、田舎で素人拵へのそばは、

昔し深川は冬木に名代のそば屋米市(深川冬木町十番地山川幸太郎)方の看板で、そば屋廢業後は座敷の床脇にはめこんであつた、自分は大正十二年の夏生田可久子の案内で一覽したが、其年九月一日の大震災で此の看板も可久子とともに亡はれてしまつた。濃橋

手作
まきそば
こめ本

両面看板幅二尺六七寸長五尺四五寸

大概同割である、それよりそば粉の割りが勝つと中々打てない、鶏卵や自然薯を繋ぎに入れても生そばはうまく出来難い、實際割りは田舎そばより、東京のそばが勝つてゐる、東京のそば屋は古來二八（善庵隨筆に二八の割合をそばを二とするは誤なり）と稱へ、そば粉八割温鈍粉二割を通例とするから、田舎そばよりは餘程生そばに近いが、捏ねに樂をするので硬く出来ない、又一つには田舎の挽きぐるみそばを喰ひつけた眼には、色の白いは温鈍といふ感念が附いて廻るからであると思ふ、よく人の話をきくに、市中の粉名屋で賣るそば粉は、温鈍粉が混つてゐていけないといふ、決してそんな事は無いが、粉名屋で賣るそば粉は古物や上割（製造の時の破片が殻に混じてゐるのを唐箕で颯り返して取つたのを上割といふ、打ち粉は此粉に限る）の直延びのしたものを商ふので、夜鷹そばなどは此安い粉を使ふのである。

そば切りも贅澤のものになると、五色そばなどいふのがあつて、赤は芝蝦の皮をむき、すり身にして裏漉しにかけたので、そば粉を捏ね打つので、青は挽茶を混ぜ、黄は鶏卵の黄味で捏ね、白は同じく白味でこねる、黒は昆布を炒つて粉とし混ぜて打つ、即茶そばとか卵麵といふのは是です、以上の五色そばを綺麗に蒔繪の重箱に詰め、昔は大名の奥向きなぞから屢誂へがあつて、そば屋には割のよい利のある品でした、今では如何か、明治年間には時折り注文のあつた話を聞いた事がありました。

今ではどこでも汁が落ちたやうですが、昔は手打では、中々汁を吟味したもので、そばと汁が同價にかゝる話を聞いた、上等の見世では、ざらめのない以前には氷砂糖を使つたといふ、普通そば屋の少し氣を附ける家の汁の製法を聞き書して置いたのを記せば、

一水五升 通例五升五合 に鯉節百五十匁を煮詰め、外に醤油一升、砂糖八九十匁、味淋四合を一所に煮立て、取り置きし右の出し汁に混じ、ザット煮立て用ふ。

一水九升に鯉節のよい所ばかり削つたのを二百匁、これを六升三合に煮詰め、(三割減) 醤油九升、一番味淋二升、あくひきの砂糖九百匁、を煮立てたのを、右の六升三合の出し汁へ二升を加へ、ざつと煮立てる。

或る古老の語に、そば屋に利久庵だの清齋庵だのと、庵號の多いのは、昔し坊主が始めたのだと言はれたが深大寺そばの名高かつた事などから見れば、さうかとも思へる。又東京のそば屋に昔から砂場といふのが多くあるが、屋號はみな大阪屋である、之れは中井履軒の齋蕎麥麩者傳に、城西沙場有「齋」蕎麥麩者曰「泉氏」善售、蓄婢僮數十百人、云々、とあるより砂場の名が高くなり、江戸にも響き、砂場の名が廣まつたものと思はれるが、さて本元の砂場は、恐らくは、うんどん屋では無からうかと疑はれる。

今の製粉器械では出来まいが、昔の挽抜だと千石通しの下に、下粉シヤコといふのが出来る、ふだんは牛馬の飼料にしかならないが、入梅季節等殻そばの乾燥が戻つた時は、拔が割れるので、面倒を見て取ると、随分白い下粉が取れる、豆腐を繋ぎに入れて、そばに打つと味は好いが、土が混じてゐるので、齒障りがしていけない、前にもいふ通り、そばはいくら精製しても、性質が小麦の如く色の白いものではない、併し田舎そばの黒いのは土芥の混じてゐるのを知つてゐると、味はよくとも旨いとは思はれない。そばの製粉の挽き詰めには、黄色をしたサナゴが出来る、之れは皮膚の洗粉として最良のもので、花柳界に愛用され、新橋其他の藝妓屋に卸してあるくの業とする者がある。

挽抜の原料としたそばは、夏秋の二種あつて、夏そばは七月が出盛りで、秋そばは十一月初旬が出初めてであつた、どちらもそばは播種より一候七十五日で成熟するのである、産地は自分の幼時明治の初年頃は、秋そばは武藏の北豊島新座の兩郡が本場で、品質が優良であつた、夏そばは武藏の箱根ヶ崎を本場とし、村山附近一帶優良の品を産出した、深大寺そばと稱へて名高いが、之れは江戸名所圖繪などに見えて、市中のそば

やが深大寺そばの看板を掲げる者があつたからで、一體深大寺は牟禮連雀（今の三鷹村）より谷保へかけ、夏そば場所である、夏秋どちらがよいかといへば、そばは寒國に適するものだから無論秋がよい、かりに其香味を人に譬へて見たならば、秋の清雅は佳人の如く、夏の粗豪は壯士の如くである、昔のそば通はそば屋でよく秋と夏とを喰べ別けたもので、極のそば好きとなると却て風味のあらい夏そばを好んだものがあつたさうです。

武藏で昔夏蕎麥の最も多く産したのは小川砂川であつたが、養蠶地なので収納が遅れ品質が他より劣つてゐた、茹つて長く畑に置いた土をかぶり、蒸れて發芽し粘力が消へ、蕎麥切にして繋がない、かういふのをブッコミといつた。そばの作に恐れるのは暴風雨は勿論、収納季の霖雨と早霜で、長雨に會へば、ちき芽が出る、霜に會へば、枯れて赤くなり性が脱けてしまふ、それでも秋そばは産地が広いから霜害があつてもどこからか来て補つたものであるが、夏そばは常陸で産しない以前は、産地が狭いので差支へた事がある、夏は取入れ季節が六月で、丁度入梅なので雨の多いのが當然であるから、ブッコミが出来易いので、夏一杯は例年足（そばの繋ぎを足といふ）の小言で困つた、長雨の悪い年には芽の出るない品は殆どない位、さういふ年には懸に廻ると、かご並みに足の小言で、握み切りのそばや、賣り先きから突き返された、喰ひ散らしの蒸籠を目の前に見せ付けられ大眼玉を喰ふので、たまつたものではなかつた、其上勘定はぬきにされ、金は集まらず、閉口した。後々には製紙原料の三極を粉にしたのを水に融き、挽抜四斗五升入一俵に酒呑猪口一杯位宛入れて切りませ、繋ぎをとる事にした、此は明治三十年前後からの事でした。

そば作に適する土質は、真土砂目の肥へた畑より、地味の悪い畑がよく、肥料は魚の鱗又はあら粕がよい、魚肥を使ふと穀に光がある、糠を使ふと目方がかゝる、下肥を使つたのは、穀は出来るが中身が少くない。

そば作は毎年種子を取替るのが専要で、三年以上一つ種を蒔くのは禁物である、一つ種を毎年蒔くと、粒が段々小さくなる、商賣にして見馴れると、俵へ差を入れ手にとつて見ると、直ぐに畑の土性も、肥料の種類もよくわかる、従つて産地が知れるのである。旦那は作る所も見ないのに、善く肥料や畑の土がわかると百姓衆に笑はれた事もあつた。

自分の幼時は武州産だけで、平年は東京市中のそば屋の原料は略ぼ間に合つて、他國からは年末一時上總から秋そばが輸入した丈で、数は四斗入三千俵位であつた、上總は東金白幡邊が品質よく、南へ寄ると土質の爲め品が劣つてゐた、其聚散地は曾我野（今の蘇我町）であつて、農家の習慣で、總て出来秋一時に賣り切るるので、仲買は資金に追はれる、荷が一舟に纏まると、直ぐに積み込むので、荷受けする此方でも、土藏は勿論軒下まで積んで、それで置場に差支へる場合があつて、荷受を断る事がある、さういふ時は午前と午後とで相場が五六升から一斗（一圓に付）も引き下げた事があつた、之れは其時分挽拔屋は他に有力の者がなく、千俵二千俵一時に仕切りの出来る者がなかつた爲めで、夫故勝手に直段の騰落が出来たので、其の建直が又一般の標準となつた、此點は所謂鶏口となるも牛後となるなかれの感がある。其れが各地に養蠶が盛んになるにつれ、武州の産額は年毎に減じて來たが、反對に地方では開墾が行はれ、そばを作る者が多くなり、常陸から夏そばが出始めたが、其産額は武州産に數倍した、下總からも八幡船橋附近から夏そばが出、品質も優良であつたが産額は僅少であつた、其後一とせ關東筋凶作の時、南部の品が八戸から船積で二千俵ばかり深川へ着いたので、見本を見ると青殻雜りの上等品なので、古物除き差し入れて買約し、自分が出張して俵に當り差を入れると、どれも少しづつ蜀黍の様な大古が混じてゐて仕用にならないので、其内三四百俵擇り抜いて買ひ取つたが、品拂底の年故、あとで段々直下げをさせ、大概引取つて仕舞つた事がある。

南部地方は藩政前から、そばは備荒貯蓄に充て、農家で十年も二十年も取り置いたのがあつた、それを俵拵をする時、新物と一つにあげて量り立てるので、總體の品を悪くしたのであつた、汽車が通じてからは年々輸入するやうになり古物も段々難らぬ様になり、續いて青森弘前から秋そばを澤山輸出して来た、青森縣の品は南部より皮が薄く地方の蕎麥では一番優良の品であつた、同時野州からも夏蕎麥が来た、常陸より較良い方であつた、其後熊本縣から澤山出、續いて鹿児島縣からも多量に輸入して、一時は東京のそばは殆ど九州産のみで持ち切つた事があつた、其後北海道の産額が多くなり、明治の末期は東京市中費消の大部分は北海道産であつた、元來地方で蕎麥を蒔き附けるのは、永久作る目的でなく、開墾其他の都合であるから、どこも一定の産地とは見做されない、北海道は場所が廣いから今でも續いて多少輸入して来るやうだが、最早關東筋はどこも一般農家自用の作に止まるのである、昭和の今日は名物の東京蕎麥は、概ね滿洲産の原料で製した粉であるとは變れば變るものである。

蕎麥は霜には此上なく弱いものであるが、其癖寒國が適するので、寒國の産は香氣が高く殻が薄く、信州蕎麥の稱あるは、寒國の爲めである、又一つには山國でつまり外に何も旨い物がないから、呼び物となつたのであらう、挽抜には小粒で向かない、之れは名物を以て許してゐるから、種子の交換をしない爲め、段々小粒になるので、田舎の人は小粒を却て自慢にしてゐる傾きがあつた、青森地方は新産地で種子の交換が行はれる故完全のものがとれたので、寒國なら信州でなくとも、どこでもよい品が出来る、盛岡地方の品は良質だが殻が稍厚いのは、武州箱根ヶ崎の夏種を取り寄せて蒔いたといふ話であるから、其爲めであらう。

東京蕎麥は汁を吟味するから旨いが田舎の蕎麥は汁が不味なので、ぶち毀した、先年木曾で名物だとして、自慢にそばを馳走されたが、汁がまづいので義理にも賞められなかつた、それだから田舎の人は東京の手打蕎

麥を喰べるのに、元手のかゝた汁の中へドブリと蕎麥を入れる、あれではたまらない。それに今では東京の蕎麥屋も大分薬味をかじかんで来たが、昔は數箇の薬味箱に澤山入れて出してあつた、先年朝鮮の生徒が慶應義塾に入學した時分、三田の竹屋といふ蕎麥屋の話に、朝鮮人が来るとかなはない、薬味箱の唐辛子を一度に平らげられるので、引合はないと滾してゐた事があつた。

自分の幼時、亡父の話に、蕎麥屋相手の挽抜屋は商賣は、下等だが、世の中の騒がしい時は商賣は下等に限る、安政の大地震に直ぐさし掛けて商賣を始めたのは蕎麥屋であつたといはれた、大正の大地震は大道のスイトンが初商ひであつた。

之れは大正の初年の事であつたが、自分がまだ生家を監督してゐた時である、夕刻入湯して見世に出て來ると、三傳といふ挽抜商が來てゐて、喜平といふ挽抜擔任の老番頭が荐りに蕎麥の見本を手にして視てゐたが自分が坐ると、旦那之れを御鑑定願ひたいといふから、熟視して三州ではないか、三州蕎麥はまだ見た事は無いが、此見本は無論美濃では無い、尾張に似てはゐるが、地味が砂目の所に出來たものであるから海寄りである、夫故三州と見たといつたら、三傳はそれを聞いて、黙つて歸つたが、二三日經つと、番頭の喜平（居宅が角等で三傳と隣つてゐた）が昨晩三傳が來て、淀橋の大將には恐れ入つた、蕎麥なぞいつにも手に取られた事はあるまいと思つたら、圖星を指れたには驚いた、實は三州へ行つて見本を取つて來たので、挽抜屋の古老といはれる二三人に見せたが、誰れひとり見當のつくものはなかつたといつたと告げた。若い時に苦んで覺えた事は忘れぬものである、併し蕎麥の目利きでは、いくら巧者でも何の役にも立たない、之れが學問技藝、上であつたらと思ふも、跡の祭りで其方はさつぱりお留守にして、一つも手に入つたもの、ないのはお羞しい事である。

○十一月十四日の維持費を合してたの規則を議定す

大隈講堂使用規則

第一條 大隈講堂ハ本大學が使用セザル場合ニ限り學術、教育又ハ慈善ヲ目的トスルモノ若クハ本大學が適當ト認メタル會合ニ供スル一般ノ使用申込ニ應ス

第二條 大隈講堂ヲ使用セントスル者ハ左ノ事項ヲ具シテ大隈會館主事ニ申出テ本大學ノ承認ヲ受ケラルベシ

- 一、使用ノ目的
- 二、使用ノ日時
- 三、使用ノ場所
- 四、舉行事項
- 五、會合豫定人員
- 六、入場料又ハ會費徵集ノ有無
- 七、使用責任者ノ住所職業氏名

第三條 講堂使用中左ノ各項ノ一ニ該當スル事實アリト認メタルトキ又ハ本則ニ違背シタルトキハ其ノ承認ヲ取消シ使用ヲ謝絶スルコトアルベシ

- 一、公安ヲ害シ風俗ヲ紊ス虞アルトキ
- 二、營利ヲ目的トスルモノナルトキ
- 三、建物又ハ附屬物ヲ汚損毀壞スル虞アルトキ
- 四、管理上支障アルトキ

第四條 講堂使用時間左ノ如シ但シ時宜ニ依リ伸縮スルコトアルベシ

午前ノ部	午後ノ部	夜間ノ部
自午前九時	自午後一時	自午後六時
至正午	至全五時	至全十時

第五條 講堂及附屬物使用料別表ノ如シ
第六條 使用料及其他ノ費用ハ使用承認ト同時ニ之ヲ前納セラルベシ

第七條 既納ノ使用料ハ之ヲ返還セズ但シ左ノ場合ニ於テハ其ノ一部
又ハ全部ヲ返還スルコトアルベシ
一、第三條ニ依リ承認ヲ取消シ使用ヲ謝絶シタルトキ
二、不可抗力ニ依リ使用不能トナリタルトキ

第八條 使用三日前述ニ使用ノ取消シ又ハ変更ヲ申出デ本大學ニ
於テ之ヲ承認シタルトキ
使用中建物又ハ附属物ヲ汚損毀壞又ハ滅失シタルトキハ何人ノ
所為タルヲ問ハズ使用責任者ハ本大學ノ要求スル損害額ヲ
賠償セラルベシ

第九條 本大學職員ハ講堂使用中隨時入場スルコトアルベシ
第十條 左ニ掲ケル者ハ入場ヲ謝絶ス

- 一、精神病患者・酩酊者又ハ他人ノ嫌忌心スル風体ヲ為ス者
- 二、傳染性疾患アル者又ハ其ノ疑アル者
- 三、危険ノ虞アリ又ハ他人ノ迷惑トナルベキ物品若クハ動物ヲ携
帶スル者

第十一條 本大學ニ於テ管理上支障アリト認めタル者
講堂使用責任者ハ左ノ各項ヲ嚴守セラルベシ
一、指定以外ノ場所ニ於テ喫煙又ハ飲食ヲ為サルコト
二、備付以外ノ場所ニ於テ火氣ヲ使用セサルコト

三、會合者ニ物品ヲ販賣セサルコト

附
則

本規則ハ昭和二年十一月一日ヨリ之ヲ施行ス

大隈講堂使用料

	收容人員	自午前九時 至正午	自午後一時 至全五時	自午後六時 至全十時	自午後一時 至全十時	自午前九時 至午後五時	自午前九時 至午後十時
大講堂	二、二〇〇人	一〇〇円	一四〇円	一八〇円	二四〇円	二〇〇円	三三〇円
小講堂	一、二〇〇人	五〇	七〇	九〇	一二〇	一〇〇	一六〇

右料金ハ暖房及普通電燈料ヲ含ムモ舞臺裝置電燈料ハ別ニ之ヲ

徴収ス

下是、預リ物並ニ案内人其他ニ関スル費用ハ使用責任者ノ負擔トス

大隈講堂學生使用内規

大隈講堂(小講堂)ヲ學生ノ使用ニ供スル場合ハ
無料トス

但シ電燈又ハ暖房ヲ使用スルトキハ左ノ實費ヲ徴ス

電燈料

暖房料

一時間又ハ
一時間未満毎ニ

金壹圓

自午前九時至正午
自午後一時至全五時
自午後六時至全十時

各金拾貳圓

前記時間以外ノ使用ニ對スル暖房料ハ其都度之ヲ定ム

料金ハ使用承認ト同時ニ大隈會館主事ニ前納スヘシ

本内規以外ノ事項ハ大隈講堂使用規則ヲ準用ス

本内規ハ昭和二年十月十日ヨリ之ヲ施行ス

を得たり他の一は依原印一坊士とす海部文ある
銅物の瓶也現代人の心も自ら多る香通
の打出し隠見え、其後、用へてよく酒和余
ハ建築の大家も、酒屋のまゝ、築を祝ふん
と物こそ、ふ者をこゝろ、謝意を表し、文
那の築、林檎城の瓦を、貯る、青、友、人、を、え
等、用、内、を、一、等、有、一、唯、此、此、の、瓦、ハ、完、全、に
て、金、花、の、巻、乃、は、資、ま、き、の、あ、り、は、悉、の
器具を貯る、こゝろ、比、ま、ん、可、と、ま、ん、し、新、用
材、新、し、く、煤、ハ、こゝろ、書、畫、の、物、款、ボ、を、用、い
か、り、し、折、柄、村、山、秋、浦、を、伊、原、圭、次、(錦、築)
の、廿、四、石、の、マ、リ、リ、を、貯、る、ま、ま、に、後、室、に

指く、大、る、味、ま、と、長、く、煤、氣、を、ま、り、考、の、室
こ、折、合、ふ、得、得、や、う、復、室、に、電、氣、の、ス、タ、ン、ド、を、焼
あ、り、枕、頭、漢、色、の、用、に、供、せ、ん、と、こゝろ、中、の、甚、ま、と、
索、あ、り、折、柄、英、木、桂、所、を、雙、鯉、の、箕、向、を、
貯、る、こゝろ、お、中、の、時、代、を、小、形、を、短、く
く、甚、ま、と、ま、り、ま、り、ま、り、ケ、ン、ド、ン、の、中、に、酒、器、を、終
ま、り、一、索、と、此、貯、を、ま、り、へ、り、内、を、入、電、を、こゝろ
田、の、金、を、こゝろ、ま、り、ま、り、好、意、を、長、く、江、念、を、え、ん、
無、且、一、桐、の、貯、る、意、を、こゝろ、の、を、積、め、こゝろ、を、茶
の、河、の、一、隅、と、思、ふ、こゝろ、ま、り、ま、り、茶、の、間、作、裁、を、
の、小、贈、者、に、お、し、可、也、出、版、部、に、お、し、念、意、の
今、に、換、え、酒、者、料、を、用、を、貯、る、ま、り、こゝろ、

良寛禪師鑄像



高サ曲尺六寸三分
上等桐箱入 代金參拾五圓也

の良寛師像五尺餘後此型家柳澤清の
心より余其面を題する二十餘年今日一廿五
洲来之んを綴りの方を刻し其形の板
を掲げ下へ置くと花を寄り得るを
此像に就て前記の祥如くすることあり今

多く言は
す
十一月十
八日記

新築を致す為のありてんも、其高甲り
仕方の廣ろい椽側は、椽子と厚子を要す
ふかふか直をまゝを踏ん入らざる。願又んハ四
邊のこの多し、從來無きなりと、皆人の好意に
より得たるもの也。まゝを一瞥する毎に好者又
漸長るべき結ひたる也。此の椽依り余の長く合
去る故を以つて若干の金を募り余と贈らんとき
こんも亦新築をあらふものと踏ん入る好意を紀
念せんことを庶幾すといふ
十一月十七日記

以上のおの佛國を杖時計を贈りてんものあり
茶盤
リ
記日前文の漏を補ふといふ

○愛博の圖書と鳥買に附し得る所の金家定改
送費に元七割と不為能と云きず此の金圖書の
身代り也云ん浪費するを欲せぬ云か利あを
家計に充んとす今日此の確安まして比較前多
くの利息をゆる法は信託金此に古めと預け入る
るもたう確安するは此に三三三井任友才あ
とも三三三友家もあんとす三年間預け入るこ
すんハ七分の利子を得ん云に信託家計を
補ハ申をを矢ハ云んハ愛博の圖書の紀念
たるを得べし云ん云んを以て切めての心をうこ
す云んとする也 おありて任友信託に
預け入る一書目 十一月十九日記
此年此の信託も、株券の相場動搖甚しや

金を投する不いあり、信託金此に託する所也

○田中伯も早大、安の船の推新あ及志士意畢
る四十餘日一昨日初めを批検 田中伯も
りし七大略を欲す、すん云伯の云も若くは
し各函皆伯自筆の題書あすハ長と云伯
し、此に大依中位の書函と稱するも毎南と云伯
近年不如意多くの金を散く得るも、すん云伯
往の事あるを待ち、聚むるに急いしハ新選
の暇あらず、此にん中一書名を缺く所以、
且の伯の考に執味あつて函に執味と云きま
似たり、函の概しと然少く、且の送るに云

きこのりし山陽華山の如き皆不欺也但し維新
志士遺墨として固き彼に傳ふるに如きハ書
畫界に於て玩賞するものより自ら其意を異
す此意味をいへば伯の寄贈の品に概に介比
このよと為すま妨けず吾人が尤も伯に謝す
きの大正天皇の宸翰一卷の寄贈中に存する
の一書とす因是に判處せし獲へきこの
阿とせる也四五の瑞書同皆宮内大臣の
七の伯く老いせんも宸翰をいへて在宮にお
ハセし時のおちと釋し奉る筆致素
朴の内々侵す可らざる氣韻あり殊に書簡
の瑞文言ハ皆帝者の威嚴を存しと而して

要件一細微に入り御聴仰の程を之視ひ奉る
を得べし殊に瑞法塔ある時の一簡ハ尤も意味
深く自此の友人を慕ハせし御用書の肉近
とありせしことハ唯此とるハ此入るの外
も也遠しと敬語をせし者同ハ尤も書き易か
らざるものも有る簡の能者とも難人する
所らるるを流石に帝者の御兄侯自れ其の純
を存せしハ希世のもの一法して及ぶべき
ありしと此懼く

十一月十九日録

美空ひばり 銀座

パラマウント特作思ひ出の名畫
 (A) 滅び行く民族
 佛國アルバトロス映畫特作
 (B) カルメン



PROGRAM

From 18th to 24th
 Doors Open 1.p.m. & 11.a.m. on Sundays

"THE VANISHING"

Directed by T. G. ...
 — CAST —
 Noplaie
 Marion Warner
 Amos Halliday
 Bart Wilson
 Baoken
 Earl Ramsdell
 Leo Etin
 Glkin Yaska

"CARMEN"

From the Novel by P. ...
 Direction by Jacq ...
 — CAST —
 Carmen
 Don Jose
 Garcia
 Dancaïro
 The Lieutena:
 Lillas Pastia
 Picador Lucas
 The C lonel Raym
 Banendads
 A Smuggler

"WE ALL THANK"

CINEMA ...
 — JAPAN — T

パラマウント思ひ出の名畫

シネマ

◆ 近日公開の優秀映畫の紹介 ◆

ウイリアム・フォックス超特作映畫

● 第七天國

名作 ジヤネット・ゲイナー嬢

チャールレス・フアレル氏共演

パラマウント社特作映畫

● ジャッツの酒場

ギルタ・グレイ嬢主演 トム・ムーア氏助演

ユニナイテッド・アーチリス社特作映畫

● 魔炎

ロナルド・コールマン氏 ギルマ・バンキー嬢共演

パラマウント映畫超特作

● 男装女劍客

クラーレンス・バツチヤイ氏監督
ゼニエームス・ホール氏助演

△ フログラム

十一月十八日より十一月廿四日まで二週間
平日午後二時半日曜日午前十二時開演

パラマウント特出思ひ出の映畫

(A) 滅び行く民族

映畫時間(夜) 五時三十分より

説明 坂野 清勝
月岡 秀粹

(B) カルメン

佛蘭アルバトロス特作映畫

映畫時間(夜) 三時三十分より

説明 永井 旭波
井口 静波

作奏曲目確定
関 廣高
穴倉 修

昭和二十一年十一月十八日開演
電話 二五七六
小 劇 室
大 劇 室
特 等 座
一 等 座
二 等 座
三 等 座
四 等 座
五 等 座
六 等 座
七 等 座
八 等 座
九 等 座
十 等 座
十一 等 座
十二 等 座
十三 等 座
十四 等 座
十五 等 座
十六 等 座
十七 等 座
十八 等 座
十九 等 座
二十 等 座

Week
5.50 P.M.
ard Dix
Wils.n
Crockett
Woodruff
h Beery
Maugre
Silgelge
an Day
8.00 P.M.
ee
l Meller
is Lerch
a Modot
or Vina
n Murat
Barrois
andoval
Ga elan
Hidalgo
Lampin



早稻田大學
大隈講堂

舞臺開番組

昭和二年十一月廿二日
午後五時半開演

主催 大隈會館

契約書

東京市牛込区東區町三十五番地

市島 白印

東京市牛込区東區町三十五番地
神道堂行教本廳代表者

柴田孫太郎

右西者所有地ノ境界ヲ^{確定}且往來ノ境界垣

ヲ改築スル為メ双方立會ノ上契約スルコト左ノ如シ

一、地所ノ境界ノ現状ノ傳即チ在來ノ外垣ノ位置

ニ因リト定ムルコト

一、境界地^長東北^長二十四間ノ間ニ双方ノ費用ヲ以テ

境界石六個ヲ打込ムコト

一、境界垣ハ往來ノ外垣ヲ取毀テ亜鉛塼ニ改メ

即時築造スルコト

一、塼ノ同一任用ノモノヲ双方各十二間ニ自己ノ費用

ヲ以テ中央ヲ南寄ニ柴田北寄ニ市島ニ於テ

築造スルコト

一、^立嵜ハ双方共自己之於テ築造る方ニ柱及控杭ヲ
秋^立ノコト

右左隣日也証書ニ通テ此成シ谷一通ヲ所持スル也

右 市島 郡

昭和五年十月日

北市田孫太郎

立會人小久保成一

井口喜四郎

隣家との境界ニ二十四河の峠あり、其を以テ
理トトメテ標を定めんとす。其の由リ境界線
トシテ隣家トモ言記ある言ハ此トあり。統向地
状ニ其甚き互ハト部リ、同し控式ノ標杭を
心んことト協定成リ他日ノ為メ境界線石を
置キ左ノ契約者ニ交換スルことトスル。其
〇余の地有テ赤坂ニ在リ、其ノ林派者ト標杭の一
章を収ム。谷村トナリ、其ノ石一を林ニ寄
セシム。其ノ左ノ石を置キ、押置キ、其ノ
セナリトナリト申儀ナリ。

小向物花天下無、曾田高士賞傾キ、梅
花高士如金見、記到君游説別云

市島大元正

玄に居士朴詠秀

朴もあつたの事と進境と日本再功の念動を
たりと余の随筆を紹介する谷村の友人方作
栄八谷村に語りなす。僕もいさる到着
まゝ一表特におもて新居に招くも一真也
十一月廿三日記

○新居の梅道進境と曰しかる所より四花に横
九字をんが新居に横きまの死許の時を要す
経横の縁をあらと或る事に入らる七迂路を元つて
まゝるる愚と笑ふことある。僕も清白の新
杖も七七日の事ある。懐も七歳の子油も七也

物が折合は彼の新比あるものを取合はるやうも
る。まゝ心が折合おもる十物のゆ至教十日也
かゝる新居を物つから早や四十四日も多漸
やくおのの身体と家を折合の比頗る気が
かゝる。置物が折合とあるも差換へたりし
日は物を買ひ入ることも少くも多し。新居を
学おは此意味に控へ不注函を元へる。新居を
欲するも多し。置物も贈り贈り習慣の強り
さるくも八枚も感せし。新居に折合ある
も山のせりある。資を以つて請書ふからである
新居に生活を一新する傾向もある。昔から

今ハ氣を物すといふが蓋し至言なり其れを新名
ニ折金と稱するものも吾人自身清新なることを
得るものも意味あり然る處を一新するハ吾人酒
更生するもの趣がある。

○早稲の大隈講中の舞臺より海を茶色の
純帳が立ち上る。此の帳は油紙を以てし此の
が校色がある。此の校色はマルーンと云ふのが早
稲田の各科より紅白禁縁の校色である。其れを
交へ合はせると此の海を茶色即ちマルーンの色
であるものがある。

○銀世術頭と教策とある店舖は四物木

此の目人物玩具を見れば、スワイランド
の、家産の婦人像は、白く、中へ趣味を
一さしものもあつた。今物動き二基を
二基と男子の三像は、一基を人面
く珠と珍とす。他の一基は巨腹の人
木のものを指す。家産の婦人と保
上に置くと多めの其味を愛ふ。但し
且一像は、不慮するもの細工の故
人

十一月廿九日記

○近來余の逸業中の文を抜き教科書に
加ふもの一二あり。隨着山陽の内の文
即ちこれとす。此亦友人新野崎君と
したるもの也。物事あり余の

春城過もし中の条に關する文を四語科副
法に之を加へんとし九の如く眼を來す

謹啓

逐日冷氣相催し候處愈々而清穢
の段大慶の玉に存じ候 陳者小生今般
中等學校國語科副讀本として現代文
精選の編纂を企て現代文の模範とし
て左記の玉文を掲載致し度切望在
茲候この儀何卒枉けて申聽許被下
度幸懇願候 尚教科用書に充へるに
のに候へば全巻の統一上玉文を傷け
ざる程度に於て假名遣その他に多少
の加筆致すやも圖りはず候被併せ
て兩寛容賜らば拜謝この事に御座
候 先は右の願身得度矣意必斯
に御座候

追而の芳墨に接せしむる節は申許容
被下候ものと見做して掲載致すべく
候間為念加筆申上候 趣具

昭和二年十月二十二日

氣のきいた世渡りの上手な者でも、同業の下職で泳ぎ歩いて貧しい生活に終るのである。

これに反し、小手の利くものはズン／＼手腕が伸び、丸假名が何うにか斯うにか切廻しが附くやうになると、畫の彫りに刀を染めさせられる。こゝが修行をして来た手腕試しであつて、畫彫りの小手調べである。初めは切附合巻または一寸とした大錦の模様などを彫るのだが、それも見立物のやうな上物の板木には刀を入れさせない、大錦でも並物と稱する新狂言の似顔畫の色板である。切附合巻にしても頭は大抵兄弟子で草双紙を彫る程度のもので彫る。草双紙即ち合巻物を彫るものでも餘程鍛練の積んだ者でない、頭は専門の頭彫りの手習双紙になるのだ。さうして軽い胴彫りに進み、大錦の中にある書入の文字、背景の屋臺引また風景を彫る。こゝまで来ればその者の手腕は相應に進み、運刀の切れ味も見えて来ることになる。これが段々と練磨

これを専門に彫る職人もある、また女の髪が毛がき即ち通し毛ばかりを得意で彫る職人もあつた。又胴彫りにしても衣紋などの線を彫るもの、模様を彫るもの、背景の風景や屋臺引を彫るものと分け、また淡ひとつ彫刻しない板地を鑿でコツ／＼淡ふ下ツ端ものもあつた。こんなやうに一枚の板下畫が墨板になつて筆者の手許へ校合摺の廻るまでには、六七人の手で捏ね廻し、色さしとなつて色板を彫るにも二人か三人の手数が掛ることになる。最も普通もの、畫には斯うした手数も掛けて居られない、が、特殊の上物になると一流の頭彫りが助手の手を煩はさず、胴彫りも背景も一人で捌きこれ見とくと、畫工と技を争ふ立派な美術品と思はれるものもある。國芳ものを自慢で彫つた名人須川簾吉の刀を揮つた大錦で、國芳畫の銘打つて出た簾吉の彫つた俠客物の圖の如きは、頭は元より胴彫りも模様も背景も刻され、緻密な模様などにも一もムダ彫りをせず仕

の功を重ねて合巻類の小道具、また模様でも彫るやうになると、モウ一ツ端の職人で同業の中でも、あれは何所この弟子であると言われる。此時が大切の修行期、あと一二年で年期が明ける頃で技術が上達するか平凡でかたまるかの分岐點である。天稟の技能あるものは頭彫りとなつて妙技を發揮するものがエンヤラヤツトだ。併し胴彫りといつても馬鹿には出来ない、彫竹こと横川竹二郎の甥で鼻萬こと豊田萬吉のやうな胴彫りの名人もある、とにかく年季明け一二年前は、まだ親方の家にくる附て居て値の知れぬ米の飯を喰ひ、小遣錢を貰つてたゞ手腕を磨くを専一に、刀を縦横に揮ふのだから合巻物などには随分精巧なのがある。時間や賃銀にお構ひなしで手腕一杯に伸すことが出来るからだ。元來が合巻物は算盤王からでは割に合ふ仕事でない、あの緻密な畫を丹念に彫るので時間を要すること一通りでない、如何に生活の度

揚げ、一流の刷工が一度見當を合せば狂ふこともなく、色と色の重なつたり隙を生じたりする所が卯の毛ほどもなかつたと言ひ、龜戸豊國ものにも豊國の顔を得意で彫つた彫竹と胴彫りの名人鼻萬との合作がある。これらは彫刻の知識のない門外漢が見ても、其鮮かさ見事さが直覺に映じて板畫とは思はれないのは、錦繪通の先刻御承知のことである。

世間から畫彫りとはいはれず、大錦屋さんで通つてゐる連中になると主に純粹の職人肌で、熊さん八さんの徒と變ることがない、懷中に幾らでもあると酒を飲んでしまひ、何時も著たまゝで随分尻切半纏一枚で彌藏を極める低級な兄イもあつたが、大抵は襟付の半纏に平紵の三尺帯がその禮服で手間賃を貰つた時などは切れ放れの好い錢を遣つたさうだ。そこへ行くとも頭彫りの職人になると、常におめへ、おれで通る我難な職人氣質に馴れてゐても、チヤンと長物を著て中には角帯をしめて

の低い物價の安い時節でも手間賃には當らなかつた。

普通畫彫りといふは、讀本の挿畫、摺物の畫、大錦、合巻もの等を彫る職に従事する技術家を總稱した名であるが、大錦や合巻類を彫るものは、鐵筆を業とする仲間にては畫彫りとは言はないで、あれは大錦屋だ合巻屋だと輕視して居た。尤も大錦屋でも頭彫りになると立派な手腕もあり、讀本の挿畫を彫らしても水際の立つ彫刻家もあるから、さう侮りの眼で見られて居ない。大錦屋の側でも頭彫り胴彫り色彫り即ち色板を彫るもの、またナツボウなどの文字でなく、戯作者の署名した書入、その畫面に就ての説明書になると文字彫り専門の手に掛けることになる。なほ頭彫りといつても一流でバリ／＼してゐる者は、其刀のナツボウは刻み込んでも、實際のところは美人ものでも役者ものでも顔と生際の毛割りより刀は下さない、頭髮、殊に女のあたまには構筆簪など種々の裝飾品があるが、

居たものもあつた。大錦屋さんの平職人より品位も稍、高く、随つて親方にしては問屋にしても軽く扱はなかつたこれは常に文字彫りの多い山の手の御家人と交際して居た自然の感化らしいと云ふことだ。山の手組の御家人には文字彫り殊に合巻類を内職にして、また畫彫りを内職にするものが多く、文字彫りでは江川派、木村派が下町にあり、山の手には宮田派があつた。御家人組で合巻の頭を彫る別派の頭目は四谷左門町の竹内熊次郎といふ人、此人が御家人の大錦屋さんを統率して盛んに彫り、その後山の手名人と言れた永山や芹澤の兩刀挿がいで、胴彫りの名手と呼ばれた島田あり、また市ヶ谷の蛙屋敷に長太郎も居た。牛込の榎町、半藏御門外火消屋敷、千駄谷新屋敷などには團をなして御家人の文字彫り畫彫りがゐる、この連中と職業上から交際することが多くなつた。で、見やう見真似に羽織の一枚も引ツかけ、風俗でも動作でも野鄙の姿は幾分か少なか

つたが、腕ツ節の強い職人には随分キ
ビ／＼した氣象に富み無邪氣な勇者も
あつた。

大錦屋さんのうちでも殊に頭彫りは
畫に艶を持たせることが大切である。
活氣の横溢した壯年時代は、その刀跡
は拙であつても何所となく覇氣が満ち
て艶を含むが、老熟すると捨て難い妙
味は出て何となく荒涼を感じさせる
は、特に大錦や合巻の畫彫りばかりで
はない、何れの藝術にも通有性であら
ねばならぬ。時世粧を描く浮世繪では
就中艶といふことが一大事で、風俗美
人繪の生命とされる、武者物にしても
勇壯の狀が消え蕪人形のやうになる。
彫工のうちでも畫彫りは殊にこれが必
要で、年を取るに従つて段々と刀が切
れなくなる。手腕に錆が出て妙境に入
ると艶氣が減るので、彼の名工彫竹の
如きは常に花柳界へ入浸つて馬鹿をつ
くして居たさうだ。それが決して天窓
兀けても浮氣はやまぬ、的の道樂でな
く、その職に忠實であつたのだと香取

縁波といふ彫工から聞いた事がある。

同人の談に老大工の龜さんは、朝四ツ
(今の十時)までは鉋も切れるが正午頃
からは駄目だと言つて仕事をしなかつ
た。それは朝一時は年を取つても壯時
の様に仕事が出来るが、正午頃になる
とモウ精力が衰耗するからだ、又聲曲
に衣食する藝術家が艶を失はない爲に
花街柳巷の地に入りして若い孫のや
うな女に接觸するも同じ理であると言
つてゐた。山口寒山(若州小濱藩の儒
者山崎闇齋門)の雨滴夜談中にも「我
家に入出入する割腕師条次といふ者あ
り、齡既に耳順に達し家もなく妻子も
なし、瓢と東西に流寓し食客となる、
然れども刀を握つて板木に對すれば、
妖麗華を欺く美人を刻す、故に何れに
到るも款待を受くること極て厚し、常
に一刀を懐にして今日は神田に在れば
明日は芝に遊ぶ、一夜陋屋に來つて快
談す、談偶、業體に移り、予割腕を職
とするもの壯年にあらざれば能はずと
聞く、汝が如きは今にして死所を定め
ざれば行路餓死し終らんと一笑す、条
次微笑を含みて曰く、吾猶十年は憂慮

するに足らず、鬢髮霜を見ると雖も此

腕壯者を凌げり、柳橋の月に憧憬し北
里の花に浮動し、刻する處の美人に嬌
姿衰亡せざらん中は、条次の生命何ぞ
竭くると云んや云々」とあつて其奇行
を列記してある。条次の傳は未詳では
あるが要する頭彫であらう、六十にし
て彫る畫に猶愛嬌のありしは、若々し
い氣質で爺染みなかつたに違ひない。
こんな現象は特に畫彫りにばかり見る
譯でない、文字彫りにもあるやうに聽
くが、これらは特別のもので普通の畫彫
りは二十歳前後から四十五六までを生
命とする、モウ四十七八となると下り
阪で刀の切れ方が鈍つて来る。年を積
むに従つて刀法は整然と極つて來ても
畫彫りに大切な艶が失せて寒風に吹き
曝された乾鮭のやうになつて了ひ、何
となく寂寥の氣が満ちて明るい陽氣な
感じがなくなる。さうなると最うおし
まひである。

附言、この談は彫勇、目藤、圓活
(二代)の彫工、芳幾、豐齋の畫工、
現今彫工の重鎮大塚、刷工阿部、
香取の諸氏から聽いて置いた談話
を綜合した畫彫り職人のホンの輪
郭ばかりである。

在傳もあつたが、浮世の横ある松花堂の画
見のふきこの多し概と松花堂情念心の
よあるを想ひ多時望の二字つきの對
幅快哉も感せしむ元位雜傳の陽中珠
二在る多し傳採遊の波湖撰物公指を執
かむ、西行定家俊成がの歌切長(多し)松花
の家よあらんかと、物も六文す福完のこまの草
皮を見衰心(多し)あり得る所あるをえの、頼政義
政(西行)文相(多し)の墨書(多し)皆(多し)在(多し)の氣に
る(多し)と(多し)く(多し)す(多し)こ(多し)お(多し)家(多し)の(多し)古(多し)玉(多し)踏(多し)る(多し)ん
古(多し)名(多し)家(多し)の(多し)活(多し)物(多し)新(多し)者(多し)概(多し)ぬ(多し)副(多し)の(多し)り(多し)あ(多し)る(多し)其(多し)の
副(多し)を(多し)け(多し)り(多し)子(多し)珠(多し)と(多し)言(多し)は(多し)る(多し)こ(多し)ま(多し)の(多し)あ(多し)り(多し)か(多し)ら

宛から新び世帯の日記の如く油度の不備
 を感ずる少からず、書畫のこともきき毎日
 毎月同じよめを扱ひ置る譯も夫れも家
 内裝飾の如きも諸事より折合はせるこのあり
 幸に新年に引移る前月の種々のよめを贈り
 来るあり、前月の早大の記念式典に合する
 又改部カ合記念として若干の金を定めて
 リ紙幣を記念として五円を定めて
 皆るあるに換けて其の厚さを多くし
 せんとする、幸は以上のことききことあり、石佛
 のよめを聊か神女ことを得たり、即ち其の
 品名と寄贈者左の如し

- 海部文新編 依前望より
- 文政表紙 毛利正彦
- 叶松花生銘詩函 内藤久克
- 合言三桐 村山秋浦
- 伊原錦雲開不歎 人須美ら
- 楊守敬書牘 金三郎
- 秋谷疎竹幅 新谷北城
- 合言下 二月書 寺崎元重
- お公生蒲団五卷 並木色
- 支那紫林系成黄瓦完璧 出版部
- 大正石馬女立像中大刺書 記念品
- 雙魚貨的 並木色

唐 物大書桐 林希也 康平板 布字 宛不詳

相 瑞西堂木彫人形二個

一 椅子二脚 椅子共

一 佛四尊 枕時計

一 外圓形電燈スタンド

一 外圓形金属天皿

一 日 呼鈴

一 銀 カップ一皿

一 朴 漆存書櫃

一 袴 一具

一 頼 淵着縁山の二枚 折屏風

一 方 枳後藤心田盆一枚

一 壽山石壺 大小十顆一函

一 大書 加木 座 米芾の書 城橋合客贈

一 壽山 白石三顆 柳 以壽山 重柳他

一 菩提 樹珠 数 同上

一 伊太利 製巻 箱 一函 紙本古筆 谷村一太

一 釜 三右エ門心 鐵瓶 重柳他

一 日 被掛 杉雪公 及 撰 同上

一 藤 製心 寝台 重柳他

日清印刷舎 北

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

出 改 都 員

坐蒲團

五枚

日清印刷舎

一 坐屏

台湾製

特文待客三紙

切手を鑑か
重柄也

一 茶器

押入共五用

楠漆も

一 錫器

三程

大工形湖

一 雲版

○ 雲山堂を併し其好む家蜀山文晁就里と
の題運を余又さとす

文晁の画の母の下に三個の在るは
蜀山上に狂歌を寄るを回す

た、め、の、り

お、お、と、い、こ、か

し、ら、ぬ、も

ちよらうし

つぎ

十八のお手紙

蜀山人

此狂歌集とぬを多し

係ある下二伝の文晁の書畫をまむこが

人蜀山か漢をかきなるを書畫を汚し

やるとのりも迷惑しけうといふが此

漢の決り七絶ありあはるを漢をゆり

畫の流きるを定ふ、個々の未歴

文林に似たり流多し此多し

のたえ北幅代歌のたしといふ一矢
の木林あふといふ人の家さる多く短冊をたしをさるの
て因えを道に板をたし人々目欲つ、自合に北人と交う
ハるいかに又贈つるえさ、北次續拾葉帳目と題
しる紙の短冊を複製し北のをたしえんたのをえさ
し中々歌のたし難いものもある、此歌人の和歌
たのたしある

梅堂の

山陽

植をきく木木の梅の根をふかむ
にはひあまゆき花のちか

山陽

梅の枝のしは行ぬの音たはて

春のたしに月うけ

三輪執事

えしく絶たうける人々の夏のま
とふらぬ終くるまをたし待た
秋のまことぬほとるんや、ハるたあくら
しけぬやとを人々とひけり

荒沖

郭公

一勢をしの田長のたしのこさ
たもこのせすかくちぬはらん

井田

秋まける又の朝前裁のめ印花蘭

音せすつちの雪の松う枝

夏の日庭前を除けす 池屋

秋の枝庭のふきを 舞うせ

舟の字音をすしんとそ思ふ

海邊(不) 春水

とちに見しみるめをわけんかすあねの

月をを思ふまのうみつら

み川士傳

いとすちにおちひかけんよ 渾しぬ縄

直る道(道)を神ふすかち

経冊に漢の志のなる古の十数枚あるや 一葉

の自漢がおちしうい

自 焚

身心捨如土木 胸中壯氣自休閑 我亦生

即業、一州漢物流物

祖先石湯王放備小島、芳門秀家放八

丈島、余文政元年在一岐島、天保五年

在漢物八島、嘉永三年在漢物鏡

皆俱如放

辛亥夏六月依在坂先生自

焚、由 一葉道人 口 禮 記

の財界の整理を使命より起る田中内閣今以
つて休銀の社未とつけの融いす十五銀行今も給

後、善派、律儀、目録、も、政府、特に、冷淡、あり、この、評
 も、あり、の失敗、ある、この、政府、も、、休、給、額、金、者、暴、動、を、起、せ、んと、す、この、
 元、凶、凶、た、ち、ら、ち、ら、議、會、開、會、を、以、て、政府、に、對、し、て、大
 抗議、起、ん、悲、し、く、、政府、の、致命、傷、を、與、へ、敗、北、を、受、け、
 不、能、に、、あ、る、ん、、況、ん、や、政、友、派、が、ち、ち、と、主張、し、
 地、理、垂、遠、の、事、も、現、定、を、考、す、る、未、來、に、屬、す、この、
 亦、議、會、の、一、州、懸、る、べ、く、、多人、が、、政府、に、議、會、を、解、
 散、せ、ん、と、謀、り、、國民、の、多、數、の、、投票、を、與、さ、二、
 與、つ、て、さ、る、べ、し、
 十一月廿六日記
 ○新、年、を、祝、し、と、注、意、が、、あ、ら、う、く、の、よ、の、を、、寄、せ、、え、、に、、や、
 二、端、に、執、味、を、、免、、し、、し、、よ、の、、加、賀、の、、金、、河、、三、、右、、門、、末、
紙、、正、、法、、が、、心、、の、、茶、、共、、と、、あ、、れ、、職、、瓶、、も、、集、、り、、念、、の、、紙、、が、

雜、掛、に、あ、る、を、二、、鳥、、通、、し、、以、、前、、の、、杉、、書、、公、、が、、書、、
心、、を、、え、、ん、、に、、書、、を、、の、、り、、描、、し、、し、、よ、、の、、肉、、色、、
 公、の、字、を、換、し、に、、萬、、年、、餘、、糧、、の、、四、、字、、が、、現、、
れ、、て、、あ、、る、、瓶、、が、、十、、右、、の、、大、、右、、の、、一、、に、、志、、近、、む、、五、、徳、、も、
環、、七、、皆、、同、、心、、に、、あ、、る、、環、、に、、や、、ら、、む、、大、、キ、、一、、く、
あ、、る、、凡、、既、、日、、が、、あ、、る、、え、、ん、、を、、家、、に、、此、、を、、ま、、え、、し、
よ、、の、、あ、、る、、す、、と、、共、、に、、お、、か、、つ、、い、、と、、あ、、る、
 ○兎、め、に、信、、り、、ん、、を、、亦、、武、、將、、會、、終、、に、、映、、畫、、を、、見、、え、、伊、
大、、利、、ハ、、ソ、、リ、、一、、二、、の、、英、、雅、、振、、り、、又、、之、、し、、こ、、の、、映、、畫、
ハ、、觀、、兵、、演、、說、、其、、地、、之、、美、、境、、を、、寄、、り、、し、、よ、、の、、あ、、る、、ん、、つ、
き、、口、、つ、、き、、ら、、う、、ら、、ム、、が、、起、、身、、以、、未、、回、、給、、と、、鞅、、也、
の、、撰、、抄、、を、、あ、、ら、、い、、し、、し、、よ、、の、、あ、、る、、君、、國、、の、、編、、輯、



メトロ・ゴールドウイン社映畫

マンダレーへの道

全七巻

ハーマン・チェイ・マンキーウチ氏 共同原作

トッド・アラウニンダ氏 監督

シンガポール・ジョー

ロン・チャニー氏

ローズ・マリー

ロイズ・モラン嬢

アドミラル

オーエン・ムーア氏

チャールズ・ウイニング

上山草人氏

パンシー

ローズ・ラングドン嬢

ヤクモ

ジョン・ジョージ氏

略節—マンダレー行の汽船には船長の妻が病気で苦しんで居た。ひどい暴風で難航したが船長は一刻も早く目的地にたどり着くことを望み、船に見せたがったので今にも水夫共が暴動を起しかねないのに、拘らさず船を進めた。然し夜明け前、船長の妻は女児を産むと共に死んだ。船には船長と看護婦の他に牧師が乗って居たが、船長の妻が水葬されるまで彼女を結婚前から愛して居たので、船長は彼女に身を捧げた。二十年後、當時の船長はシンガポール・ジョーと呼ばれる船宿の主となつて居た。彼は顔中瘡だらけで一方の眼は白眼と言ふ恐ろしい形相をして居て、何んな悪事でも平気でやつてのけた。彼の相棒はチャーリー・ウイニングと言ふ支那人だつたが、その他に提督と呼ばれる英國青年シエリックもジョーの仕事に加担し、法網を潜つて居る。マンダレーには小さい骨董店を営んで居る美しい乙女が居た。その近くを告げることは堅く禁じて居た。そしてジョーは娘の顔を見て一人で行つた。鮮血淋漓の大亂舞の糸口……

説明 山野一 徳川夢聲 伴奏曲目選定 貫洞喜代治



伊太利ルウチエ映畫 監督 下位春吉氏

ムツソリーニ

全七巻

此映畫を監督してゐる下位春吉氏はファッショ運動當時、文豪ダマンチオ等と共にファッショ黨員として活躍した唯一の日本人である。

稀有の大政治家ムツソリーニは獨裁政治を理想とし、首相の大任と共に、外務大臣、陸軍大臣、海軍大臣を兼任した。航空軍總司令として自ら飛行機を操縦し、護國總司令として國內治安の軍隊を作つて活躍した。

彼はもと労働者で、二十五才迄は左官を職業とし、しかも激烈なる社会主義者であつた。當時伊太利國內は猛烈なる社会主義運動の爲の如く亂れて國民の幸福、安寧は全く阻害されてゐた。時に彼は驟然として悟る所あり、祖國と共に榮ゆるに非ずんば地上に幸福も平和もなし、の言葉を絶叫した。

この言葉に多大なる共鳴を感じ、彼の下に馳せたる金鐵の黨士二十四名があつた。即これ黒シャツ黨の濫觴である。黒シャツ黨員僅か二十四名とは云へ、愛國の精神を燃ゆる熱血の結晶であつた。

ムツソリーニは叫んだ、我等には義務ありて權利なし、唯己の義務を遂行する事を主張し得るの權利あるのみ。身につけたる黒シャツは何時たりとも死ぬる覺悟の白装束を意味するものだ。決死の黨士二十四名の愛國心は伊太利社会主義運動を撲滅した。僅か二十四名の黒シャツ黨は國体の平和を確立し、國民の幸福を保証した。

かくてファクタ内閣の瓦解後ムツソリーニ内閣が出現した。以上はムツソリーニのヒーロー的な自傳の小引に過ぎないが、映畫は華々しい英雄史の全豹を展開する。

説明 石野 馬城 伴奏曲目選定 長谷川秋甫



鐵蹄萬里

全六卷

チアドウイック映畫

ハント・ストロンバーグ氏原作
スコット・ダンロップ氏監督

ルネーク・アレン……カレン・ランティス氏
 チェット・ギルダ……アーネスト・ヒリアード氏
 パークレー大佐……アリニス・コウイングトン氏
 トム・ガイルス……オテイス・ハーランド氏
 ネル・パークレー……クララ・ホートン嬢
 メリー・アレン……ユー・ジェニー・ベッセル嬢

略筋——ケンタッキ山村に育つたアレン青年は土地の富豪パークレーの美しい一人娘ネルと戀に陥ちて居た。が、パークレーは生來のお人好しからギルダと言ふ他國から流れ込んだ腹黒い男に欺かれ、オークホールと呼ばれた廣壯な邸宅を金の抵當に取られて了つた。そしてそれを苦にして死んで仕舞つた。

ネルに思を掛けて居たギルダは、これを機會に根強く言寄つたが、すげなく退けられ、彼女を寵閉してまで思を遂げ様としたが、ネルは身を以つて逃れそこにあつた一隻の小舟に乗り込んで仕舞つた。雨後の激流は滔々と彼女の軽舟を木の葉の如く弄んで逆巻く急流を下り危機は刻一刻と彼女の身に迫つたが幸ひアレンの献身的の冒險に依つて彼女は漸く助けられた。アレン青年は嘗て、パークレーに捨てられた廢馬同様の仔馬を動物愛護の美はしい精神から懇ろに介抱して訓練した結果、今では更生した様な立派な競馬用の駿馬となつた。アレンは此の駿馬を利用して、南部の年中行事であるフュティリティの大競馬に参加させ、資金を調達して氣の毒な戀人ネルの身を救つてやらうと決心した。所が彼の敵手マーシャルは立派な此のネルの持馬と自分の持馬とすりかへ様と企んで居た。が、大競馬の前夜これを發見して敵の裏をかき美事榮冠を獲ち得てオークホールをギルダから取り戻し二人は愛の生活に入つた。

説明 丸山 章治 伴奏曲目選定 長谷川秋甫

メトロ・ゴールドウイン社映畫
パークレーの首
全七巻

スワリールルルルル

沙漠の中に発見した 成吉思汗の墓

豪奢と怪奇に満ちた 七百年の秘密

二十余年の苦心遂に酬いらる

蒙古の英雄成吉思汗は、七百年の長日月を砂塵うづまくゴビ沙漠に眠つて居る、がそのふん墓は深く埋もれてむなく世界の史家を驚かして居た。ところが、一八八三年以来二十年の長い間成吉思汗のふん墓を求めてあらゆる苦闘を続けつゝあつた有名な考古學者にして探検家であるロシアのペー・カー・コズロフ氏はつひに最近ゴビ沙漠の死都カラ・コトの麓きよ近く英雄のふん墓を見出し奇蹟的の成功として學界賞讃の的となつて居る。幸ひにしてふん墓発見に關するコズロフ氏の手記を得た本社は、日本において眞つ先きに蒙古七百年の秘密を報道し得る事を喜ぶものである。

成吉思汗のふん墓に到達したのである。その墓は山腹へ切り抜いた迷路の向ふにあつた。それは四十フイート四方の広さで黄色の大きな四角い木造の棺は、成吉思汗時代の様式によつて飾られ、中には英雄の遺骸を安置した銀の死棺があつた。そしてこの銀の死棺は成吉思汗の紋章を刺しゆうした長さ十フイート、幅四フイート位の旗によつておほはれてゐた。彼が生前征服した王侯七十八名の冠の上に安置されてあつた。墓所の後部には、彼の

写真にとらしてほしいとラマ僧に願つたが、許されなかつた。しかしその社を守るラマ僧の重立つた者に、貴重な贈り物を差し出した。ラマ僧の重立つた者に許されたのである。最初この墓に達する前私達は一つの押へ室を通つたが、そこには妙な色をした実物大の虎ライオン及び馬が立つてゐた。私は案内人に一体なんでこしらへてあるのかといつたら「硬玉でつくつてあると答へた、私は丁度小鳥がさえずる様な音楽的な不思議な声をきいた、それはめつたに見られないコングル二十日車である事がわかつた、



これは、成吉思汗の墓を守るラマ僧の使ひと考へられ、ラマ僧は日廻り草の種子や密で綴つてある、墓を守る七人のラマ僧は黙々として、決して普通の巡礼者と語るを許されぬ、しかし私の連れて行つたアランヤンだけは成吉思汗の子孫である為、特に会話する事を許されてゐた、ラマ僧のいふ所によると成吉思汗の死棺は、古代蒙古の

ふん墓を発見するまで私は二十年の間絶えざる探検の旅をつゞければならなかつた。先づ私は蒙古のラマ僧及び有力者と懇意にならなければならなかつた。と同時に蒙古語をまなびそして私自身が蒙古人である必要があつた。そしてこの長い苦心はつひにむくむくいられ、ウルガのある

ラマ高僧は、私にこんな事を教へてくれた「成吉思汗のふん墓は大切に保存されてありませう。それはオールドス地方にあるのです。そして一年にたつた一度即ち第三ヶ月の第三十一日に成吉思汗の子孫と特權を興へられた一定の蒙古人だけが、墓に詣りて英靈を拜し供へ物をするのです」とそれからロシアで教育を受けた成吉思汗第十八世の後えいアラシャン・ジンギスカンは

私の冒険に、友となり、そして案内役をつとめ、蒙古人があらゆる手段をめぐらして秘密にし、世界の歴史をさへ欺いて居る

の連れて行つたアランヤンだけは成吉思汗の子孫である為、特に会話する事を許されてゐた、ラマ僧のいふ所によると成吉思汗の死棺は、古代蒙古の

の形にさせてつくつたものである。死棺の周囲には七つの聖なるランブがおかれてある。そしてこれは絶えずとほされてゐる。死棺の上には硬玉でつくつた大きな鐘がつるされてゐるが、七時間毎に一人のラマ僧は七回打ち鳴らすのである。ラマ僧はこんな面白い事を語つてくれた。それは一年に一度祭祀を行ふ折、成吉思汗はゆる霊となつて起き上り、ランブを

消して、ラマ僧の首長を社の後方にある黒い石板の所へ連れて行く、そしてラマ僧の手をかりて、次年度の發言を書くといふのであつた。そして私達はその發言を見せられた。私は十三世紀の頃、英人の僧りが羊の皮に書いたといふ

バイブルの、写しと金牌も見せてもらった、それらは旅行家マルコ・ポーロが成吉思汗に贈つたものである、私達は成吉思汗の愛妾ドルマが、ラマ教の女神の一人として偶像とされ、蒙古のラマ寺院で崇拝されてゐるのに驚いた。私達はドルマについてラマ僧に聞いた、すると彼等は「愛妾ドルマはこゝから二百マイルばかりはなれた所で、ピラミットの中に葬られてゐる、私は尋んであなたをそこへ案内します」と答へた。私はラマ僧達と共に四日の後そこに赴いた。しかし惜しい事には馬賊達の為めに幾度か荒されて

みた。古いラマ僧は、私達を案内してドラマの本堂の墓につれ下つた。それはピラミットの下方四十フイートの所にあるのである。その入り口までには一杯神がしきつめられ樹木は繁つてゐた。だから入り口をきれいにして、大きな石をとりつけた。それに半日もかゝらねばならなかつた。

地下の迷路 を通つてやつと私達は埋葬室に入つた。そこには眞白い大理石の死棺が安置され蒙古語と支那で次の様な事が書かれてあつた。こゝに后ドルマは静かに眠つてゐる。后は、成吉思汗の病歿前、自らの命をたゞれん事を大王に願つた。そして后は成吉思汗の爲に、あらかじめその墓所を用意した。成吉思汗は后の願ひを入れ、后の胸に碑を通した。后は成吉思汗の胸にいだかれつゝ世を終つた。それは彼の先に立つ事七日であつた。

○又吹男壽之嫁したる二女病を得て三十五歳を二期ニ去
 逝す、此女七と杉山茂之嫁す曰橋入りかきしと云人
 を又心久吹の後をとりて迎へたる。杉山ニ一男あり、其
 ニ又一男あり、前年肺病を病み夫人と曰死し
 歿す幸々回復し、其後肺患ニ罹り久しく病
 命運子に静養をす、為め久吹家を炊すこと少
 かざる、先角世子の不幸ハ其家を離れ疾患ニ
 罹り死の者ひくことあり、勅士まんば夫人ニ絶り
 んて炊河ノ北す、後事し終ニ死因と為す、此女
 の境遇七二めし、まづ静養中、野老齋と云、此
 し、其も又炊河を除かん為也、終終の時天を
 眺みて、死んで、うし、まの、実ハ、邪教の修養の

ニ因る也、臨目ニ先ら終ニ洗禮を受け、ツリ
 スト教の式を以て、葬禮を行ふ、聖三一教令を
 英國工部局、ハル派ニ属し、四教に依り、キリシ
 教のものとす、其家の子キリスト教をなす、此
 地めを以て、姫めとす。

味の光、一年有、此の、河を、葬禮し、
 先も、人、破鏡、こも、ん、難関、と、よ、治
 め、こ、ろ、ろ、き、こ、と、得、せ、し、め、ろ、う、先、の、終、養、の
 婦、に、信、す、る、こ、の、あ、る、を、見、る

故矢吹久子埋葬式順序

昭和二年十二月二日午後二時
東京聖三一教會聖堂に於て

司式 牧師 多川幾造

一 奏 樂

聖職入場 會衆起立

一 挽 柩 聖 語 (一頁)

一 詩 九 十 篇 (五頁)

會衆座す

一 聖 書 朗 讀 (九頁)

會衆起立

一 聖 歌 第 四 (二十五頁)

讚 三百六十三
古今三百二十六

一 使 徒 信 經

會衆跪く

一 祈 禱

會衆起立

一 聖 歌 第 十 二 (三十五頁)

讚 二百二十七
古今二百

會衆起立の儘

一 葬 儀 祈 禱 (十六頁)

一 聖 歌 第 九 (三十一頁) 古今二百五十五

一 奏 樂

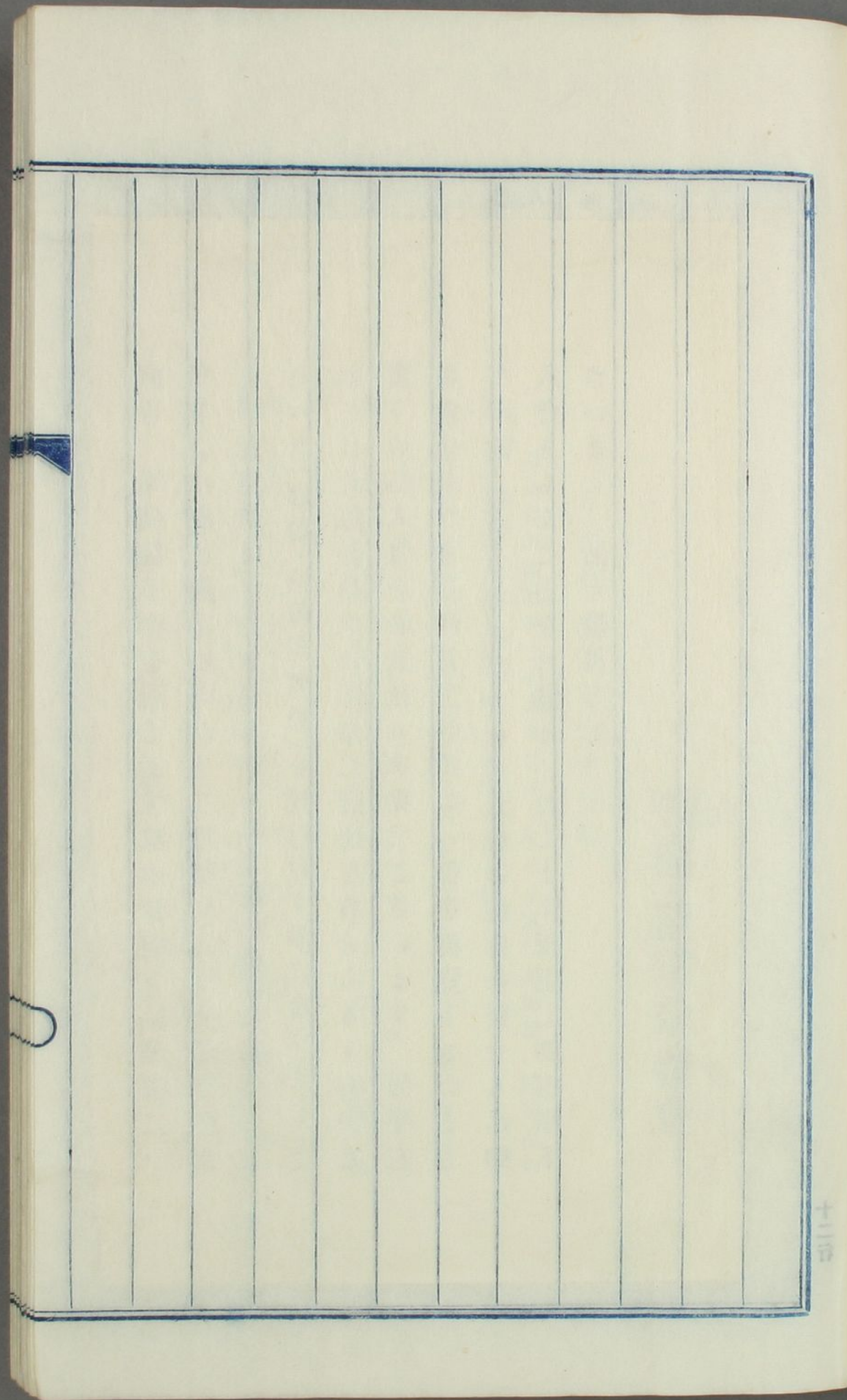
聖職退場

一 謝 辭 親族總代 (家族親族皆起立)

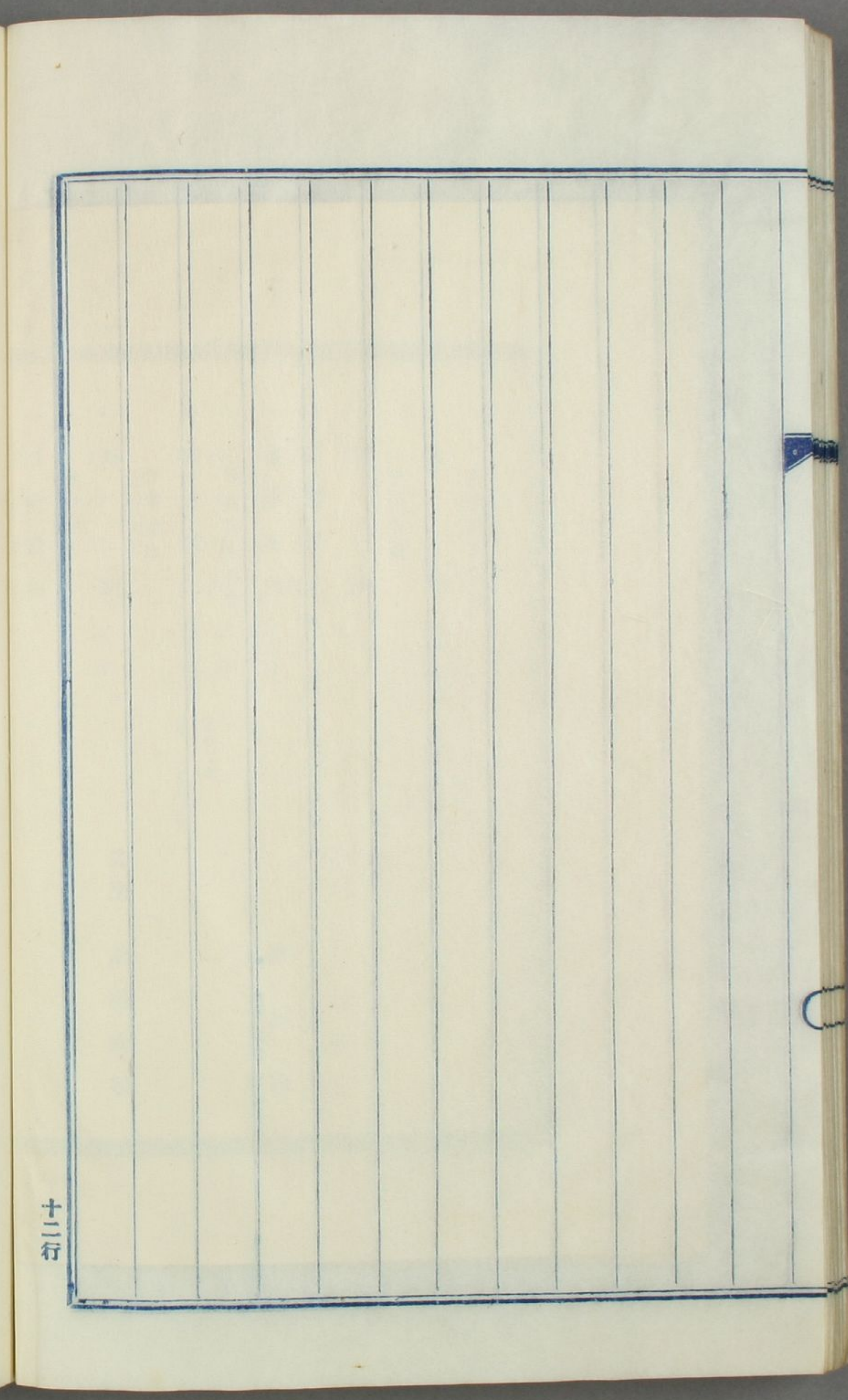
會葬諸氏退場

長老 洪恒太郎

司 式 者



十二行



十二行

肅啓 筆硯御多祥を祝します扱本會創立以來茲に一年幸ひに會運隆盛に向ひ十二月初旬には文藝講演會を讀賣講堂にて開き明春早々「文藝年鑑」の基礎となるべき「評論・隨筆家名鑑」を刊行致す事になりました。就ては此際評論又は隨筆に關係を有せらるゝ有力な貴下の御入會を希望仕る次第でございます。何卒左の會規及び本協會員芳名録の一部を御覽下さいまして評論・隨筆振興に努力せる本會の趣旨を賛せられ御入會あらんことをお勧めいたします折返し御返事下さいまし。勿々敬具

評論・隨筆家協會

殿

評論・隨筆家協會規程

- (一) 本會は評論隨筆の振興を目的とすると共に評論家、隨筆家相互の親睦共済を計り其利益増進に力む。
- (二) 本會の目的を達するため時々會合を開き又講演、雜誌發行等をなす事あるべし。
- (三) 本會は會員の慶事に對して祝意を表し不幸に對して吊問の誠意を表すべし。
- (四) 會費は毎月金五拾錢とし毎年二回（三月、九月）に分ち六ヶ月分宛取纏めて集金郵便により徴收すべし。
- (五) 本會に常任幹事一名、幹事、書記若干を置く其任期は一年とし改選は會員全体の選舉に依る。

回會員芳名錄

(其一部を掲ぐ)

石原純	犬田卯	林久雄	林房雄	新居格	尾崎喜八	尾崎敬止	大槻憲二	河竹繁俊	横山健堂	田中貢太郎	辻潤郎	成澤玲川	野口米次郎	笹川臨風	佐々木指月	清澤洌	木村毅	一木義良	鈴木史朗	鈴木秀湖	白柳秀湖	
生田春月	稻毛咀風	林癸未夫	橋爪健夫	本間久雄	小野賢一	片野久彌	吉江喬松	高島素之	高須芳次郎	土田杏村	村松梢風	矢田挿雲	堺利彦	佐藤新次郎	北澤新次郎	南江二郎	平塚明子	西村眞次				
井汲清治	長谷川如是閑	馬場孤蝶	長谷川天溪	千葉龜雄	荻原井泉	尾佐竹猛水	賀川正彦	米川正夫	高島正輔	鶴見祐雄	永田龍雄	村松正彌	小島德謙	澤藤惣之助	北村喜八	下田將美	日高只一	藤澤衛彦				

本會には入會されませぬが、内田魯庵、徳富蘇峰、五十嵐力、幸田露伴、新村出、濱田普陵、下村海南、柳田國男、薄田泣菫、三田村嘉魚、杉村楚人冠語氏其他本會に對して厚意を寄せてゐる方々が少なくありません。

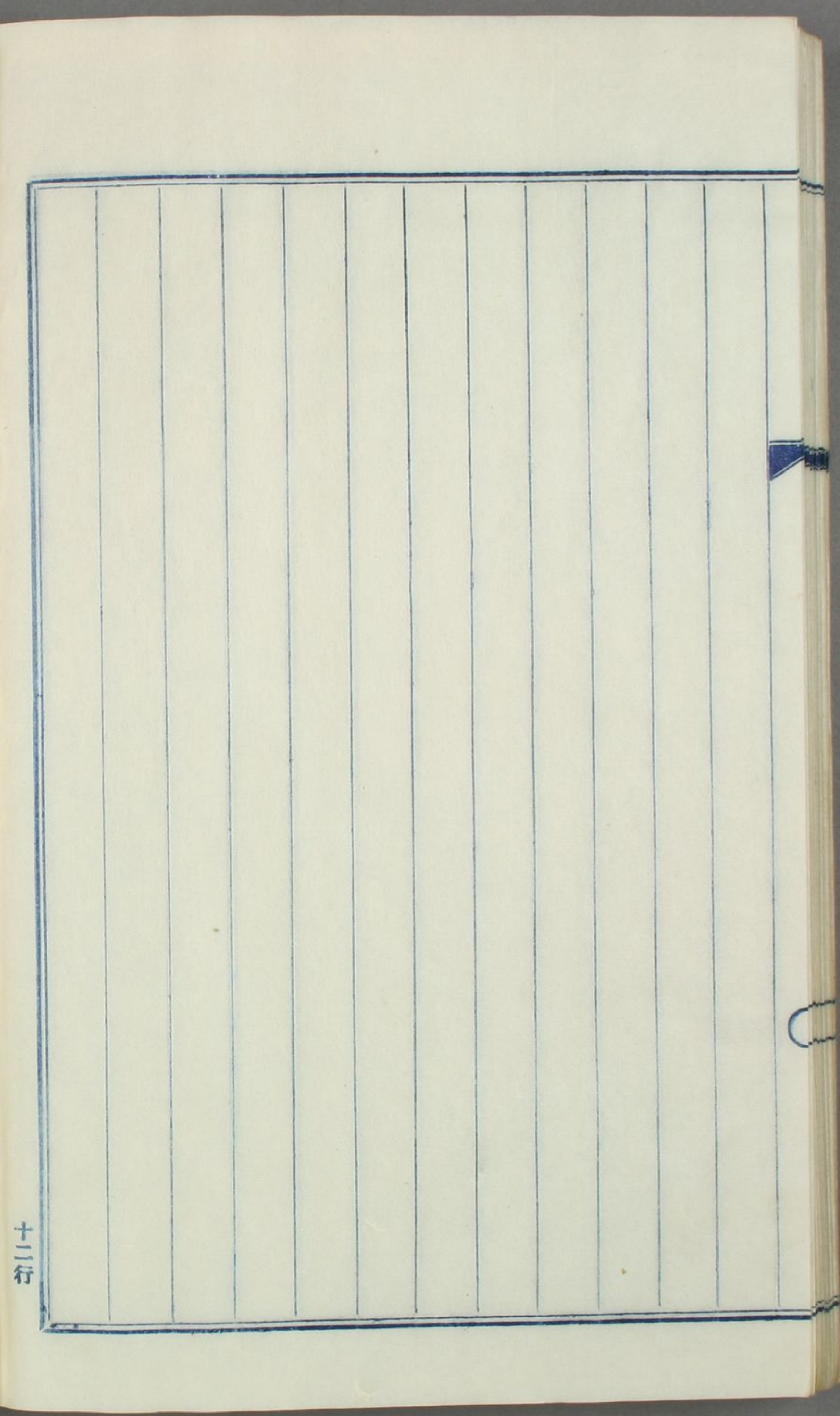
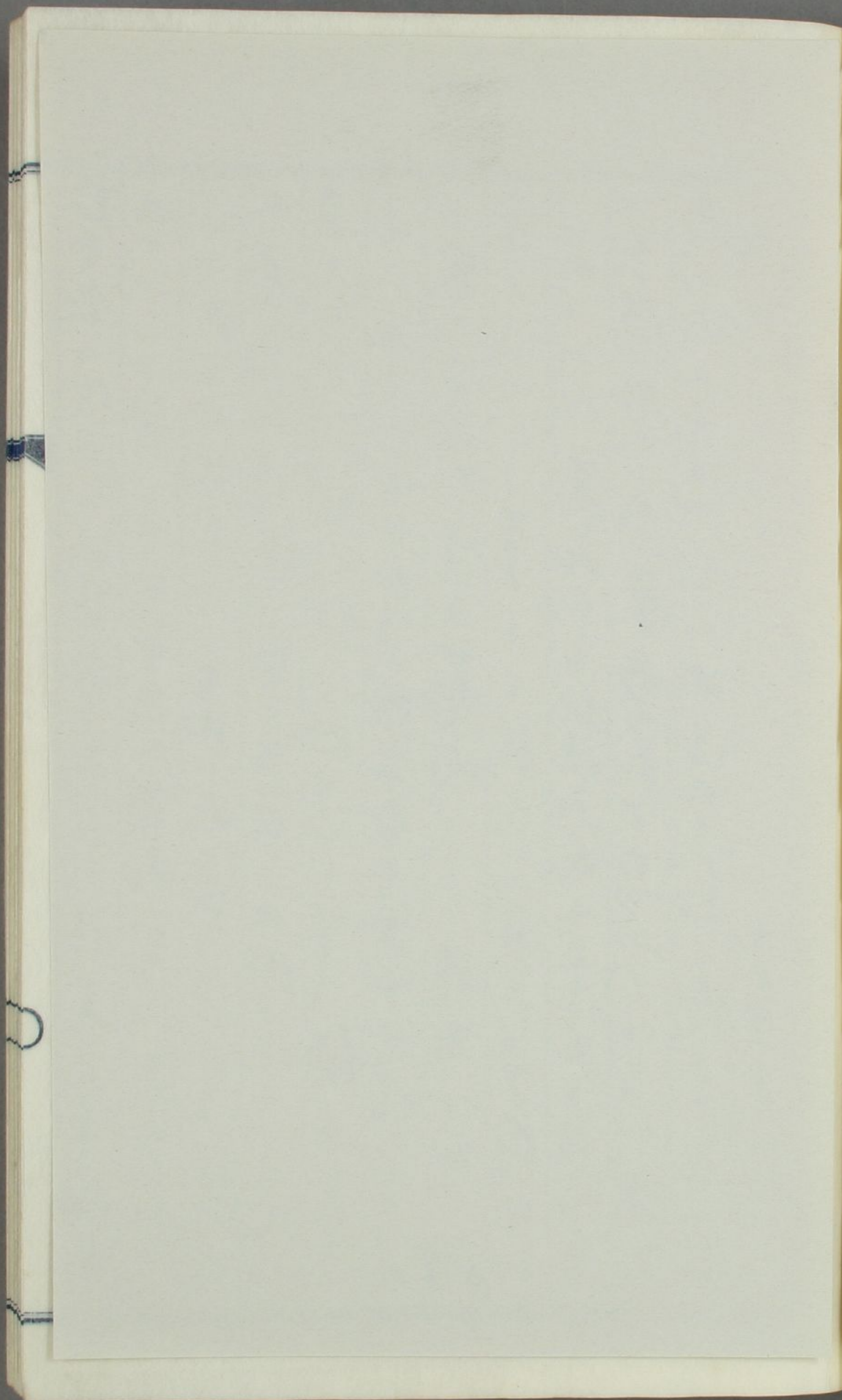
○因者より是れも新に集りて其の音も、珠玉を
主人余の愛するもの利を得たりと二三の因
也を礼を以て贈る未だ、購余未だ因者に絶縁
せざる可似多、好むは因者に細川十洲の
梧桐園全集、百、余多く十洲の若也を集め
しここの初めを見る所也、例より自家の定規
を以て、此人の執味極め、持たざるも、服す他
の書曰く集古官印致証、時遂後我也、否
本三冊官印考証の初めを見る所、時遂後我
也、遠き者も、刻を以て、余者も、存す、これと
著者一人の筆字と見ゆ

十二月六日録

This page is a blank ledger with 12 vertical columns. The columns are separated by thin blue lines, and the entire grid is enclosed in a double-line blue border. On the left edge, there are two blue markings: a small triangle pointing right and a semi-circle.

十二行

This page is a blank ledger with 12 vertical columns, identical in layout to the left page. It features a double-line blue border and 12 vertical columns. On the right edge, there are two blue markings: a small triangle pointing left and a semi-circle.



十二行

○を家の復興の数年前に成つたが、積算が年間取
れ七ヤット計の算が出来た而初一万八千九百九十二
田と日まの積算の算を略々其通りに行つた
が、算を復讐し、算を二階建てに心り
直し、門塙や坪を改道し、襖を表を
居の千とやらせし、植木等を五十の坪に
て家の前面や庭の一側面を復興し、物
置を必りし、と結ぶ二萬六千田は、
リ、つた、前初から地住ハあつたこと、内心考
へて、たから、今更にあつたと思ふ、ひさしの、総経
費の内二千五万田ハ内子の支出に傷つたことを茲
に附記して置く

十二月十日記

新築本宅積算積算

一万八千九百九十二田四十六畝也

貸付家積算積算

二千九百六十三田七十四畝也

臨時追加工事費

二千八百六十一田九十四畝

茶室修築物並門塙改築
等も合算也

三〇ノ

二萬三千四百十八圓十四錢

内入金

二萬千五百圓也

差引

千九百十八圓十四錢

外三時建具代 三百十四圓 三十五錢
製費代 二百二十四

外二千元拂

金銀千十四圓四十二錢

表里屋植木屋 風呂設

付費也

総計

二万五千八百六十二圓也

外二

金百三十圓也

市税臨時員控
有内三行在內也

金百八十圓也

去家障子
以障子
費追加

金百五十四

去家
襖代

如ノ

二萬六千二百二十六圓也

の爲る多くをより其れを今に或許の如く家定存心
比して敢て狭きものありて而して固者當意骨董
の類納れ其他の押入に充ちて其物も多き其の款を免
かぬが、此の押入を得て散放の花を珠に骨董
部類の目録を心得、此年賣りしものも残るの
よの今記憶せしものも目録を依りて其れを
何れ、実物を捨てて存しをと思ひの改
きもあつた、其印せしと思ひの改
おもあつた、随つて捨つて物し、積り可
この百十五點に及ぶ、當つて不花せしもの
四分の一に過ぎず、但し印の部類ハ今に陰
或る印は四五と傳入し、其れを
糖粉

と異なるもの多し、愛惜のものあり、物味の爲め
且つて花せんことを切すと、
以上のお伝書に在るの目録は、大略目録
を依りて固者并に書畫約二万五千點
あり、但し家定、自物本ハ頗る山草多く
十數函に滿ん、此類の内に入らず、
此の目録を得て、散放の花を目録を一
冊子に洋字し、其れを互のんこと
を依りて
○先陰夫の如く本年剩す、其れ許の如く
折日あるもの掛物ハと思ひ、其れを
を依りて

仰觀玄津由一息萬里を奉

丁未暮長秋惟完の口

此幅早晩松高のこの也

○余の今世に於て職工の爲め此の柔術の道徳
を達つ余扁額を採し士魂高才の四字成り
偶々一夕日本人を懐ち中なる勢山満の産後探あり
リ人の嘆に應じ士魂高才の四字を採し高の字
を誤つて高と心る嘆高政者を懐れ勢山高
と曰く余の志が下手なりと余もこれと曰し
誤りも隘（九）の氣のつくもこれ余も亦士魂あり
喧嘩のね手ハ敵と認する不（二）女とさるも高
ハ乃ち得え心こあらずと一歎と一礼と一哭す

（十二月十三日記）

○今世ハ一（三）の印一顆贈り来り

琥珀印

内詩を細利す

中村甚某台の心也

琥珀ハボウくくを贈り
まくきこの也甚某台の苦心と云
へたり、流石に刀痕鮮ハハ、映の
たへたるを示す、歎儀あり、家持
の珠とちすまは是る

十二月十五日記

今更に心ゆくも見直の大ききとぞ敬まらざるべし

れあるものはことごとく木版手
摺とし、原本の原色を其儘に仿
佛せしめんことに力をそそぐこ
とをいたしました。

□隨筆文學選集續編に編輯すべき
書目及び内容の詳細は内容見本
に就いて御高覽にあづかること
として今茲には其各編の概要を
記すに止めます。全編十二卷。

製版費は第一期と同型。各冊
に大部長編のものを出発する限
り纏め、其間小編のものを挿入
し、書類の數全編を通して五十
種以上。各書ともにタイトルペ
ーシを附し、解題を施し、校合
の嚴を期し、原本の眞を傳へる
事に努めます。

□隨筆文學選集 續編書目□

千秋樓	全十六卷	著者	同人	板坂卜齋	全一卷	著者	同人
隨筆	全十六卷	著者	同人	春の七草	全一卷	著者	同人
環海異聞	全十六卷	著者	同人	櫻櫃前	全一卷	著者	同人
不忍叢書	全十六卷	著者	同人	文字考	全一卷	著者	同人
恥奇漫錄	全八卷	著者	同人	遠明	全二卷	著者	同人
揚鴨既筆	全十卷	著者	同人	漫抄漫寫	全三卷	著者	同人
さへづり	全百十卷	著者	同人	世の中	全一卷	著者	同人
浪華	全五卷	著者	同人	さくさ記	全一卷	著者	同人
古事談	全七卷	著者	同人	享和雜記	全三卷	著者	同人
街談錄	全七卷	著者	同人	文々集要	全十八卷	著者	同人
筆の靈	全廿七卷	著者	同人	黃昏隨筆	全四卷	著者	同人
雨粟餘情	全一卷	著者	同人	雜蘆	全九卷	著者	同人
駒の朝	全一卷	著者	同人	圓蘆	全六卷	著者	同人
志理	全一卷	著者	同人	圓蘆	全八卷	著者	同人
中村	利貞	著者	同人	圓蘆	全八卷	著者	同人

□尙第一期に編纂し得なかつた物
で續編に編挿すべきものにわが
ころも。皇都午睡。餘身婦。關
崎摘考。其他を入れる事に致し
ました。

□尙此の外に數十卷の寫、刊本も
既に校合を済ませた者もありま
すが、更に取捨を嚴とし、空前の
稀籍珍書の一大書庫たらんこと
を期したいと考へて居ります。

□殊に挿入の繪畫を木版手摺の數
度摺を數十葉となく挿入するこ
とはいまだ他の叢書に見ないこ
とで、これが完全は甚しく困難
でありませうが、弊社は「残す
るに足る」本を作りたい爲めに
犠牲と努力とを敢てはらひたい

考へて居ります。

目録を急元月録と云ふを急南と見か、嗚呼

錦城漫筆	全十卷	著者	太田元貞
千種の	全一卷	著者	殿村常久
根ざし	全一卷	著者	殿村常久
筆架大居	全一卷	著者	狩野探幽
士日記	全一卷	著者	不詳
紙の渡方	全一卷	著者	不詳
月齋雜考	全一卷	著者	清水瀆臣
結旺錄	全一卷	著者	松岡玄達
歌久禮問	全一卷	著者	石塚豊芥子
吉原大全	全五卷	著者	澤田東江
蘭學階梯	全一卷	著者	大槻茂實
提醒紀談	全五卷	著者	山崎美成
已心圖考	全二卷	著者	不詳

逍遙博士古稀を前に 永遠に教壇を去る

お名残の沙翁名講議—— 愈々今明日大講堂で

「沙翁」は随分振れてゐる。と言つて總長は暫く休養され今度は總長とは切つても切れない間柄である。閑閑の恩人。閑閑の古老坪内博士も今明日由緒ある大講堂に於ける長講議を最後として永久に風貌に接することが出来なくなる。幸ひに博士の余生安らかならんことを祈つて止まないものである。

二羽鳥の一人として古稀に達するまで種々雑々、暢氣と無主義に徹底した逍遙博士は一學期より開講中の特別講議「キング・リヤ」をお名残として永遠に學園の教壇から博士の姿が見えなくなるといふので、さしもの講堂もこの一世一代の名講議を聞かんと手近いところで目白の女子軍の懇米と帝大外語等多方面にセンター・ジョンを呼び毎回大人満員の札を掲げる盛況、博士も老てますますさかんに

奪合ひの 聽講券 他方面に激動を起惹す

「演劇博物館の基金にお宅をお賣になる」と聞いてみますが、「それは事實では學校の好意でやつて呉れるので別に自分がやる仕事ではない、基金とか維持費が随分あるので提供したまふことである」

元氣な翁は讀者に誤である仕事と誤譯に専心余生を送られるが、さすがに教壇のお名残りは想ひ出深きこと故感慨無量の感である

「演劇博物館の基金にお宅をお賣になる」と聞いてみますが、「それは事實では學校の好意でやつて呉れるので別に自分がやる仕事ではない、基金とか維持費が随分あるので提供したまふことである」

元氣な翁は讀者に誤である仕事と誤譯に専心余生を送られるが、さすがに教壇のお名残りは想ひ出深きこと故感慨無量の感である

團十郎 張の降もどき

手振り口振り面白くヤンヤと喝采を傳してゐるが、いよ、今明日を以てお名残の幕を閉ぢる事となつたのでこの名講議の終りを飽まで意義あらしめたいと大講堂を解放し多数の聴衆を收容することとなつた、余丁町の老博士を訪ふと「今後教壇に登られる様な御望みはないのですか方々で先生は元氣だからいつかは……」

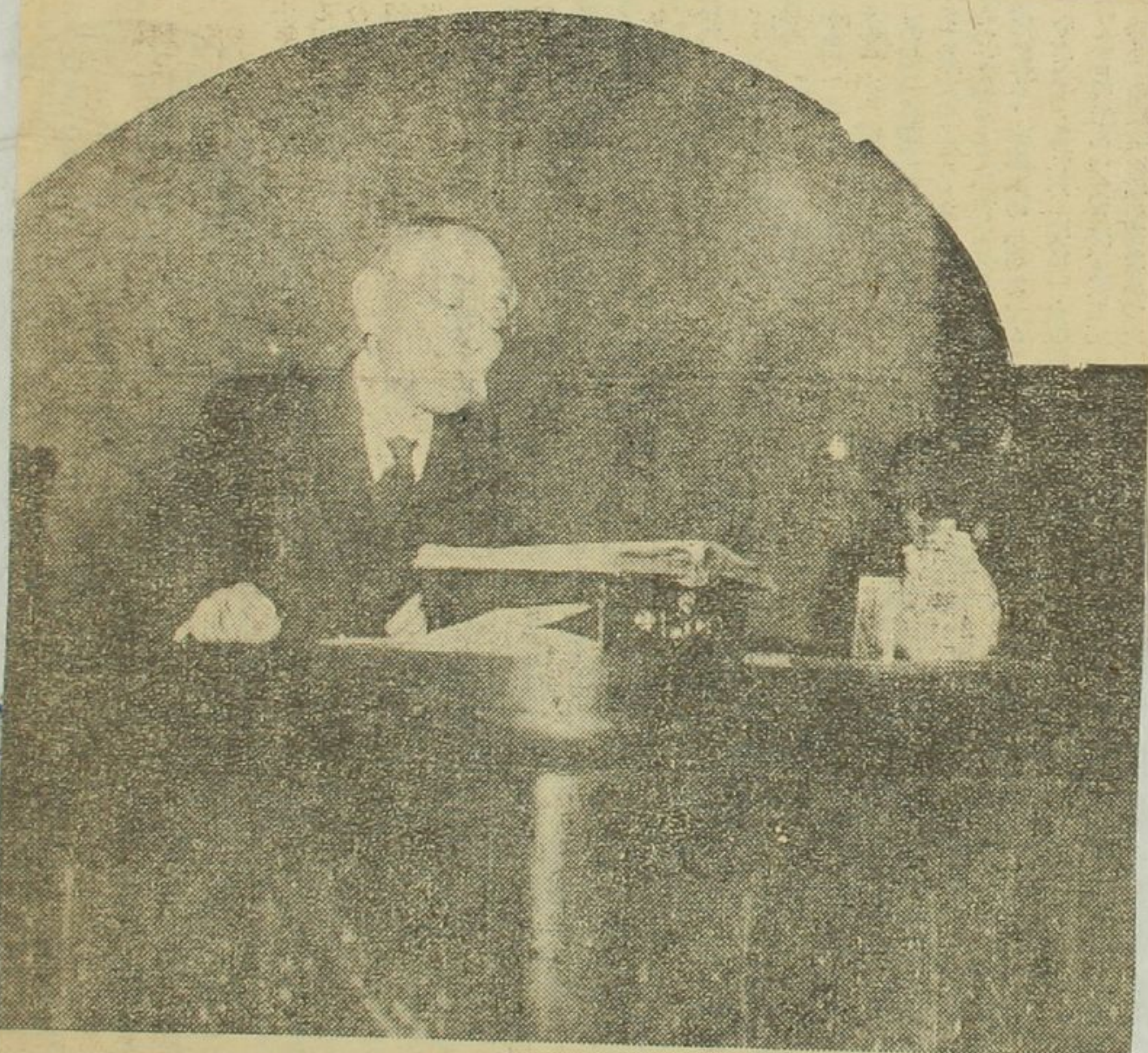
「否もうこれでいよいよお終ひで第一船が歸だから、一體新聞でいろんなことを書いてゐるが、つづく昔に名譽教授として教壇から却いてゐるんであつて今更なことではないと思ふ、震災後にやつたのは文學部主催の文化事業研究會の講義だったので、今度のは文學部のため五十嵐君の手傳ひしただけのことである」

「余生はどうしてお暮しになるのですか」

「まだ沙翁の翻譯が四つ残つてゐる、他に澤山の仕事が残つてゐるので仲々忙しいのである」

「外の仕事つて何んですか」

「それは云へない」



日本壇の上坪内老博士

○紙市會舎。化念を野々し。余七一其の品
を懸心し。余の家改先を任り折柄。欲する所のよ
家具也。仍て私室日本を。数葉去りきり。桐を
投棄す。三枚を。三枚を。三枚を。三枚を。三枚を。
座の座敷。大桐を。思ひ。一箇の座敷。三枚を。
座二枚。米幕の書も。螺鈿。三枚。形勢
堂。三枚。試み。内部を見。四枚の板を。以つ
て。畏す。板。皆。ハメ。ハツレ。を得。米幕の詩書
ハ。蓋し。圓。者の。詠。待。也。書。架。有。り。こと。知。之。し
余。初。め。を。念。指。動。く。書。比。吾。家。之。れ。を。置。く
べき。所。茶。室。の。一。隅。壁。の。ある。所。を。構。へ。他
に。あり。か。思。く。こ。こ。書。架。と。せん。ら。ん。こ。こ。印。道

を。収。め。る。の。所。を。供。せ。ん。と。表。を。構。へ。之。れ。を。購
ひ。家。に。運。ん。じ。縁。境。の。高。く。置。く。題。は。吾。家。を。得
たり。直。に。印。道。と。収。め。二。十。個。大。小。の。印。道
を。収。め。て。友人。と。物。地。を。存。せ。し。唯。比。情。を
在。家。私。印。を。納。め。る。印。道。半。百。有。り。其。有。り。さ
指。々。あり。き。為。め。入。り。能。り。最。下。の。桐。板
を。上。く。る。の。柱。を。置。を。存。せ。ば。納。の。得。く。し。不
日。工。人。の。手。を。煩。て。ん。こと。を。庶。成。す。と。云。ふ
余。か。書。書。の。圖。者。骨。董。の。類。多。く。道。に
書。に。附。く。と。存。あり。其。の。文。字。も。有。り。時
に。印。の。も。皆。存。在。す。今。此。桐。を。得。て。家。を
全。部。の。印。を。一。處。に。収。め。印。の。教。心。埋

之んを依り初めて成る。美を以て賦作合の仕方
情に依る也。この日を長を記す。こと此件
十二月廿一日

尚記す、静かみ未世帯の詩書を讀むに記
句五字句皆七字句一詩全からせるは似たり
或は一加米連続するものあり詩の首句を以し
る歟不依の國あるを是れ成とす。おのをも
おを此を情と名んぬ。不可なり。他日
印を人の手にとりて物することありとす。此の
樂の家は存せし。人の心なきに極うて得
たるものあるは也。此後或る七十廿日也
す。日上日再改

○依る印(二)号(七)代(七)の気味あり。或は
印亦てえん。同(二)を記す

日中室に凍くを寒のふみ徹る

雪の下の息づまゝの村の田舎

雪ちりりく今おの酒くまむ

○文藝の印(七)号(七)代(七)の気味あり。或は
をぬきこゝに切枝をぬき。此の漢物に資
す。こと此

今(いま)の同志社大學(だいがく)總長(そうぢやう)海老名(えい)氏の夫人(ふじん)は、大横井(おほよこい)の女(むすめ)、小横井(こよこい)の妹(いもうと)であつて、關係者(かへんしや)は必ずその邊(へん)の事情(じじやう)に通じて居(ゐ)らう。



名工出世譚

文學博士 幸田露伴



時は明治四年、處は日本の中央、出船入船賑やかな大阪は高津のほとりに、釜貞と云へば土地で唯一軒の鐵瓶の仕上師として知られた家であつた。主人は京都の淨雪の門から出た昔氣質の職人肌、頑固の看板と人から笑はれてゐた丁髷を切りもやらぬ心掛が自然その技の上にはあらはれて、豪放無類の作りが名を得て、關東關西の取引の元締たる久寶寺町の井筒屋、浪花橋の釘吉、松喜、金彌などと云ふ名高い問屋筋の信用も厚く、注文引きも切らずと云つた状態であつた。九夏

三伏の暑熱にも怯けず土佐炭紅々と起して、今年十六の俵の長次と職人一人を相手として他念なく働いたお庇で、生計も先づ裕かに折々は魚屋の御用聞きなどを呼入れて、世話女房の酌で一杯やるといつた無事な日常、世人も羨む位であつた。が、儘ならぬは浮世の常、この忠實な鐵瓶職人の家庭に思はぬ運命の暗影が射し始めた。それは、京都に名高い龍文堂といふ鐵瓶屋が時勢の變遷、世人の嗜好に敏なるところから在來の無地荒作りの鐵瓶に工夫を凝らして、華奢な仕上、唐草模様や、奇怪な岩組などといつた、型さまざまの新品を製鑄して評判をとつたのが抑々の初め、追ひつゝ同職の誰彼もがそれを真似して益々珍奇を競ひ立つたので、正直一途、唯手堅い一方の釜貞は、時流に悠然として己が職分を守つてゐたが、水清ければ魚棲まず、孤高を銜ふ釜貞への注文は日に少くなつてゆく所へ持つて来て、同じ土地の新八、太七と云ふ職人が考案した七彩浮ぶかと想はるゝやうな新鑄品が「虹蓋」と名づけられて世間の評判を博するに至つたので、今迄釜貞の上顧客であつた數軒の問屋筋も商賣大事さから一人減り二人減りして、何時しか釜貞の土間には、炭火もとかく濕り勝ちで、結局仕事が無ければ貯蓄のない職人のことゝて米櫃の中も空であるのが多いやうな仕儀となつた。



居喰賣喰の心細い生活がやがて窮迫を告げるに至つた。釜貞は無念の齒噛みと共に今は已むなく、我から問屋に足を運んでせめて一つの仕事にでもといふのであつたが、彼の虹蓋さへ作つて呉れるなら二十が三十の仕事でも頼むとの口上に頑固一徹の彼は火の如き憤怒と共に座を蹴つて歸宅した。

斯うして何の才覚もなくして我家へ歸る途中、釜貞の心中には時世へ對する呪咀に満ちてゐた。が、明日の糧にも氣心を配る女房の顔を見れば、釜貞も人間、只暗澹として首を俯する他はなかつた。

ふと、土間を見ると鍵を持って何やら打つてゐた倅の長次が、親の憂を身に引取つたやうな服付で、
「父さん、矢張り虹蓋の註文で腹をお立てになつて歸つたんですか！」

と尋ねるではないか。

「ウム、その通りだ。だが長次、お前も十七、虹蓋つくる奴等が手筋も大方知つてゐるやうが、世の中は千人寄つても盲ばかりの素人たち、見かけ倒しの品物でも異つたものを嬉しが馬鹿さ加減つたらねえ！」

すると、長次は、親の心子知らず、只目下の窮状を見るにつけて、父親の徒らなる憤慨に異見を挟みたくなつた。

「でも父さん、何も商賣、お客様の喜ぶのが虹蓋なら、長年の経験で父さんにもその製法は判つてゐるやうに、ひとつお氣を入れ替へてそれを作つて問屋を奪り返しては如何です。今日も御留守に米屋の親父が來て蓄つた米代の催促をするやうに、それに炭屋や質屋の……」

め川蒸氣に乗つて出立した。

久々の訪問に手土産一つも調ひかねてきまり悪さに胸を掻きむしられる思ひで霜の朝をその親類へと迎り着いた。と、何とはなく變つた家内の様子、奥の間より洩れて來る線香の香などにハツと驚きながらに通ざれると、未だ通知も届かぬ刻限なのにようこそ來た、實は母が八十の高齡で遂に昨日死んだとの悼み言、釜貞は佛前へ差出す一物もなくまして非常の際に無心に來たとも言はれもせず、茫然自失の體であつた。

四

一方、釜貞の家では、倅の長次は朝起きると共に父親の居らぬを怪しみ母に仔細を問へば、斯々の次第と涙の線言に、齒を喰ひしばつて口惜しがつたが、これもみな、新八太七の類が爲せし業、ようし、斯うなつたら幼しと雖も我も釜貞の倅だ、虹蓋位の手口が判らずに措くものかと、それから凡ゆる智慧と經驗に照らして土間に轉つてゐる地金の屑をかき集め、灼き、打ち、



云はせも果てず父親は、
「馬鹿！ 手前までがそんな腐つた了簡で、歿くなられた淨雪師匠に濟まぬとは思はぬか、輕薄な細工物は云はゞ廢り易い流行物、一流の操を立て、己の分を守るのが名人氣質だと云ふのが分らぬか、この不了簡者、米屋がどうの、炭屋がどうの——假令餓死しよう、今更虹蓋つくるやうな卑劣な了簡を持つてたまるものか！」
と、大喝するのを、蔭で女房は夫の日頃の氣性を知つてゐるだけに只黙々と涙を拭ふばかりである。
かうして、背戸に泣く音もいたく衰へた秋の夜長、親子三人枕を並べはしたが思ひの悲愁に満た不眠の幾夜、分ても釜貞にとつては辛い苦しい悪夢の夜が續くのであつた。

三

貧すれば鈍するとか、分別も智慧もありながら、頑固な氣性がつひした借金と目となつて、釜貞は、一月二月と經つうちに、破れ障子破れ衾の夜寒に思案もなく、有る程のものを悉く賣り盡して露の命を細々と繋いでゐるが、山と重なる諸方の支拂も云譯ばかりでは濟まなくなつたので、萬一にも此處ばかりは頼るまいと念じてゐる京都の親類を尋ねるた
又焼又叩き、虹蓋の祕傳を自ら編み出さうと夜の目も寝ずに苦心に苦心を重ねたが、どう工夫し、どう溶かし合せても、似よりのものさへ出來ず、憔悴せんばかりに幾日を送るのであつた。

釜貞は、他の不幸に際會して目的の無心も云へずといふて明日の命を繋ぐ糧さへ無い我家を想ふと矢も楯もあらず、男を任せ心を殺して幾許かの金を才覚して大阪の家へ細々と認めた手紙に添へて送つてやり、自分は他の職を見つければ、向京都の縁者の許に身を置くのであつた。

長次は、やがて思案の末、新八、太七の買つけの藥舖に行つて藥を調べたりして腐心するのであつたが、一向その祕法も埒明かず、果ては病人のやうに幼な心を痛めるのを、母親はとかくに慰め訓へて無駄な努力を止めようとするのであつた。
しかし長次も親譲りの負けぬ氣性、湯加減を儻んで名刀の名を馳せし刀鍛冶左文字の故事を學ぶの最後の智慧を以て、

或日は薄著、或日は曉暗、亦時として通りすがりの様を装つて、新八、太七の工場の前を窺つては中の様子にそれとなく注意を拂ふのであつたが、却々にその効もなく、そのまゝ日数を經て行つた。

五

一日、雪降り凜々たる寒氣の中を例の如く太七の家の前を通るうち、ブツツと切れた下駄の鼻緒に轉ぶ途端、無作法に笑ひこける太七の家の職人共に何が可笑しいと詰り寄るうちふと一人の職人が細工場の戸を開けて外を窺つた。その瞬間であつた。一種の異臭の幽かに浮び出るを敏くも感覺した長次は、身體の痛みも口惜しさも忘れ、洗足のまゝに我家へ一散走り、
「母さん、判りました、判りました。虹蓋の祕法が判りました。鐵漿です、あ、あの苦い鐵漿だつたのです。」
と、雪まぶれ泥まぶれの體を疊に擦りつけて、語氣も亂れて埒なく云へば、母親は呆れて我子の顔を仰ぐの他なかつた。
元來金屬の細工には色を出すのに、必ず鐵漿を用ゐるもの、釜の仕上師ならば何處の家にもそれ／＼貯蓄があつた。

て、殊に古いものを珍重するため、弟子は獨立するときその師匠から幾許か預つて貰ひ、それをまた己が弟子に預ち傳へるのが例で、中には百年餘りの鐵漿を有つてゐる者さへある程で、もとより釜眞の家にも家傳の鐵漿がないではなかつたが、たゞそのありふれた鐵漿などが「虹蓋」の色だしに用ゐるものだと、不幸年少の長次には考へ及ばなかつたのである。

が、さて長次は、一度太七の家で嗅いだ鐵漿の臭にヒントを得て忽ちに利發の性は虹蓋の祕法を自知し、それからと云ふもの一心不亂、鍛へに鍛へた苦心の虹蓋は今迄の同職より一層鮮かな色を湛へたので、奪はれた顧客も難なく舊に復したのみか、家運順に擧り、日に隆昌を追ふて後には父親を迎へて目出度く家庭の和樂を悦び合ふ身となつた。

この幼年の長次こそ、誰あらう今尙宮城前に威風凜凜たる馬上の勇姿を止める彼の楠公の銅像を鑄造した岡崎雪聲氏ではあつた。

○早大の資産を調査せんといふ委員を奉り余も
六世のり、今日大體の方針を議す、亦五茶を刑
除の外大體を可しとす但し同考其他者も重
日内價格を全く下すのあり、亦價格を
減すのあり、先帝の御也、御治帝の御
の如き、よのあり、幼の如き、よのあり、強を誦傳也
す、御置什具御報を他人とする、決ま西徒
の元油とある、亦も難儀する、殊に圓者、此
の如き、よのあり、冬却に就て實際の右法を傳
○委員今又提出せしむる、こととす、
田の事、今又提出せしむる、
十二月廿二日

財產價格決定方針

参考資料

第一條

本大學ノ財產ハ左ノ標準ニ依リテ其價格ヲ附ス

一時價ノ明瞭ナルモノハ時價ヲ附スルコト

二時價ノ不明ナルモノハ財產價格評定委員ノ評定

シタルモノヲ附スルコト

第二條

前條第二條ノ場合ニ於テ財產價格評定委員ハ左

ノ方法ニ依リテ之ヲ評定ス

一土地建物其他ノ工作物ニハ専門評價人ヲ選定

シテ價格ヲ評價セシム

二圖書ハ其原始登録價格ヲ以テ評定價格トス

三機械器具標本ハ原始登録價格ニ所定ノ有價年數

ト其殘年數トノ割合ヲ乘シタルモノヲ以テ評定價格

トス

前項第二條第三條ノ場合ニ於テ財產ノ原始登録價

格ヲ知ルコトヲ得サルトキハ當該物件ノ保管箇所長ト

調度課主事協議ノ上假ニ之ヲ定メ最近ノ財產價格

評定委員會ニ於テ之ヲ決定ス

第三條

前條ノ評定價格ト會計帳簿價格ニ差額ヲ生シタ

ルトキハ維持費會ノ承認ヲ經テ之ヲ調節ス

第四條

財產價格ノ評定ハ十年毎ニ之ヲ行フ

第五條

動産又ハ不動産ノ有價年數ハ左ノ通り定ム

一、建物

二、機械

三、器具

四、圖書

五、標本

六、什器

七、工作物

○未だの八兵衛好武彦郡本山村字つとむり安兵衛
忠治中しし車前山から獲た一羽と山陽
の物記ありとも云々

余典王香村山山談破酒

初為神之源以詩

破君初花外村神香腰漆

吉運存廣々横理君立記此是

春時舊瓜香

兼

此の歌の紫巻を帯ひ赤漆の的を懸く又蛇
横五法を以て神修しあるといふ王香の廣々
崎の人を許文と云ひ其の王香國其書者山陽

の序あり王香と云ふ山陽の事ことを記さし此歌
此の歌の紫巻を帯ひ赤漆の的を懸く又蛇
○山陽の目●形の包社歌がキヤラメルを
考ふるもあま時節柄氣が利いりあふか
器のこ酒桶の女妓や婢に遊べ唯此僅
かのまふ遊び政府のこのま人を惹き力か
つくまふ遊るまふと云ふなり

○亞米利加の婦人ハ馬鹿に云ふ決り度の日
本から見るもあまも初めあり在る
人が公國の草生に横臥しあふ不見不
の紫の米田婦人がでざと其の横臥の男を
踏いで道つたの日本男子ハ無社を答ぬ

此が其婦人の笑つてお手取りする所である。増えたり
ある、五米利加の去年紀事ハ二十無礼を穿
ろ光榮とする氣味ハあるのひきさてこそこの婦
人七自由人ニ對するの寸法を擬したるものある。
○進化論者の説くを人類の先天的ニ畏怖の念
をもつてあることある、此のふしもある、是れを漢文
で見ると、畏怖ハ人間の胎兒が早く感ずるもの
である、けいれん、又は潜伏してあるものもある、今迄
の時狭い家を通る苦痛の事ハも畏怖を發
せしめるものがある、今迄の苦しい事ハも母の心を
まへとつゝ、一現あるか、思ひぬ。
○娼婦の辛勞を考へれば、義法もと流し

又つと、注いで客を動かす辛勞の内は、吐き戻し涙
を催す法として、ぬ襷を襟裏に括むる事として
おくときいてあるか、花柳の、ある風がたつ
く研究さんておつのに、一息を感して
○此改連日回者や又お敷を致し理していろ
くのものを發見して、中にも、ジミン、ステキア、ト
ミルの尺録の字を又出して、いんき前身
濱田和氏博士の洋行した所、英吉利の婦人
は、ゆ来余、煙草をたぐひ、日本よりを得
難いものがあるか、自分の家まで洋室が無いか
ら、歎息も七折も入る、其後笑ふんが互いに
のひあるか、知らざるものか、又た、誰れの像

やらでいふかきむしり葉を去らうとあつらふ
思ふと、遠くは歎息のこぼれをゆるぎぬ
氣のつかさおの縁を種をまき入ぬれを
芽は日本の音徒は此の若者に夏ふ所かあつら
むい思敬す心き有縁へんひ、容貌は温和の
内は胃腸は難い品位もある晩年の爪は揃
影の事ことハ終るぬぬ
十三月廿六日
〇こし一ツ歎息は悲しと助けぬよあがある、ま
ハお人異来江部(本の新)のちいれ心はむある、
出人のちが清きあつたか、自分の家は今存して
あるの、此心はむある、いんを紙紙：今流に
ちいれ行むのち、別に用ひるまきむちいる

竹匡底は竹あひこみえんをみひ洋風の類
縁は世もいもえんを松竹よこはまきとせと
こみえんをいもきやとああすと、佛壇の上の可
りのアキがあつて、何かとあつていもきとあつ
つと、えんはむあるとあつていもきとあつ
と、徹したを林あし得るい
十二月廿九日

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

A blank ledger page with 12 vertical columns and a double-line border. The columns are of equal width and are separated by thin blue lines. The page is otherwise empty.

十二行

A blank ledger page with 12 vertical columns and a double-line border. The columns are of equal width and are separated by thin blue lines. The page is otherwise empty.

○歳終概つて本年の行事を懐の、本年は丸七の
るの算をまじ、たゞ日記の内からヤ、廉三ちる
ことを抄録す

一 月刊雑誌十五〇に発行したる春城隨筆初
版二千部二十〇部を全部受取、直ぐ
二版を出す

一 春陽堂の稿を交け余が監修したる漫
談の流初年一月より受出す、春陽堂
の儀をとりあし自持巻

一 中央公論二月號に「山東赤山と鈴木牧
之」と題する長篇を掲出、二巻七十三回
の財金を交々

一 親友昆田文二の遺稿をとり入現中のま
に終に折く

一 大隈侯ハ十五年史完成の事、信考が
より紀念品として銀杯の考の字真を
贈らる

一 台湾重刊に嫁し、長女新故ありて性
来と絶し、此れ此春復帰を許す

一 早大大山教授の進退二つを、大正学給撮
を生す

一 余の監修に依り書局社より発行の隨
筆、文字集、集、全集に出版の思ひを
り、其の巻首に「余の隨筆、概」一篇

を掲ぐ、此書は全部十二冊分の花を
と多くぬむ

一 昆田を悼むの文を早稲田学報に掲
載す

一 家苑の小品玩具と整理し二冊の跋を
得て其目錄をなす迄に陳列棚をなす
ことを切す

一 震災の際の掃の回繞する四十五回
の掃戻を交ぐ

一 家宅を改造せんとして先の設計圖を心
す

一 文藝春秋の嘱に應じ、温文と文藝と一

一 篇と字のす

一 二月二日隨筆文子送集才一冊發行
雜誌書室に紙の説を載す

一 二月七日 大葬儀
私學の汪学雅(思ひ出すまゝの才十)を
早稲田の報に告す

一 書向社にも地著集送集巻輯改訂
三百冊を交ぐ

一 早稲田学報の田志望の以暗の圖成
り親山大親の慰問の字のを新書(未)
張り余七世の二月十日

一 大隈侯八十五年史の編入文を時古新報

の文章を撰ぶに事あり

一 家宅の改造に大工井瀬前島に托す又後
窓工費約一萬五千圓二月廿六日先母の
一千圓交付

一 書局社に雅遊書局者を刊行せしむる旨
り其の稿に應じ日報を此り進み并に家
稿本若干は送付

一 石油時報に烟草礼讃の稿を呈す
す

一 三月十日殿室を牛込大塚町丸巻地
定の余と静光姉妹引移る

一 右引移に付古物入大箱十三個出版部

の倉庫に移す、不用洋装を脱すにるの
冊を印

一 文章春秋も三十四日謝金を多く

一 冊共康平祖母(歎)死云二冊

一 雜誌(経済)の稿に應じ経済隨
筆一冊を投稿

一 早稲田友会の囀に應じ福地梅齋を
士の訃稿評しを寄す

一 飯室に移り居る中三日より日課として
他著(随筆)春城(稿)の稿を起し
始む

一 畏田の碑文其他を立案して成す

- 一 早稲田の報社とて四階一年連続的
と号せり。河儀とて号する所あり未だ
- 一 市山房の病み症に漢和字典の批評
文を必り時事新報に掲載に掲出せる。二十
日謝金を受りて
- 一 早稲田の朝刊理工科創設の追懐
録を号す
- 一 四月五日五軒の本宅新築上棟式を
行ふ
- 一 三月末の四民評を依上加藤羽鳥の一
文を掲げ余と藤羽鳥(内田南堂)植楠
の三人を南代三大随筆家とて評論

す

- 一 四月下旬迄養老山陽中七段成り
- 一 四月下旬昆白の巻首を芝田に埋葬
二つき余帰省又式に臨む
- 一 此の帰省偶々梅花湯開期に逢し如も
北流川堤上の梅を見る。加流川漱石
余興つる力あり。而も一里に及ぶ堀
割を見る。此行を以つて如めとす
- 一 五月八日春城東二隨筆の草稿成
る時を号す。美に二十一日
- 一 五月廿日早稲田の報社、早大の土地賃金の
稿を号す。思ひ出連続篇の一也

一 五月市田ラフセツト印刷工場を買収し、
日清印刷会社に併す。こゝを平波面
目と一新す。

一 此月某の夜十一時日清印刷会社満橋
小島製本所(分社所も建物)に失火し
その損失甚大なり。

一 改定中の本定を皇國生業とて
萬二千圓の保済を附す。

一 高田の四十年記念誌、余の
追憶文を定す。

一 早稲田の報、早稲田の五大農物の一文を
定すと思ひ出法の一事。

一 日清印刷会社の十日拂込、五月三十日

一 文藝部、倶楽部の囀、三三三、木戸松南公
のローマンス一篇を定す。

一 郷人成川久利、長井雪村の書集を出版
せん。其首端に余の題字を定す。乃
ち考して其ふ。

一 高田博士、半澤若、はるしを刊行。其
の、坪内道造、余の、其の神注を、と
出、乃ち、好月草、を、加筆し、終に
跋文を著す。

一 書函宛誌、淡出、境の、一稿を定す。

一 日清印刷会社の、余の、社長、給年款、三

千圓の金に更なる五圓と換ふ

一 早稲田大学共の資産油を考さんとし
委員を奉る奉るも亦此の如し

一 坪内逍遙の記念書生事とし九廿九日
を暮り演劇場物館を没けんし一委
員を奉る余委員長に推せん六月以
後翰旋

一 昆田文治中死後余の考りありし所
遺族より青森山女の厚儀を贈る

一 女婿重梅他十六年振りを此屋初め
七余の家に来り

一 家定建一築費とし七金七千五百一十圓

出放部とし金六千圓銀のりし借入

一 七月廿四日新島の校友会に臨む

一 七月廿六日大改に逍遙記念書 業後校
舎の夏会あり金臨時、日市内二十数
家戸別訪問を為す

一 八月一日臨業春秋六種出放二週を
せしすとし一放二千ありしちりし二放
をん

一 太陽の嶺と原に山陽論と寄行也
十四日謝金を受く

一 本宅の原室を修理す

一 逍遙記念書業にあり得るの附を

中二八月末奉金銀十萬に奉す
 一 早稲田大各記念(四十五年)式典を奉け
 大隈海軍に大衆を令す、**招魂**
 殿一切岩若の祭典を行ふ、**招魂**
 閣する程々の設備を遂に全括中し
 となる
 一 早大式典と共に出版部の四十年記念の
 分を催し三つ回の記念品(伊西先生
 大理石像の像)と酒肴料を因を
 受く
 一 十月中旬余の務者全部を去り却し連
 米の消費に充てんと決意し都下四五の古

店に托し準備に着手す
 一 九月上旬印刷会社従業員より不南の要
 求出づ、不穩職工十名を解雇し紛擾
 を免すしと已む
 一 出版部倉庫に全部移けある余の尾を
 を集めて所を為の都下の書局を主
 人五名以外手流置干を今度内延
 きしカートを心くし**総務部**
 一 千一者部を三四五組に分け
 ありしを、外に書外として目録に収
 めたるもの数々あり、因に界未を有
 の受主とす、今部を大隈分館と定

の十月十四日下見、十五、十六入札との決す
札元書店を譲渡すに概き酒名を認
す

一 帝國通信社紛糾余取締役辞表を
提出

一 早稲田大各維持責任欲満ち政基
の復興重任、総長河越より数日
余宛に書きたる事大也

一 昆明文壇中紀念社と協賛公を
し余もその主宰とを議す

一 文藝復興会社に海を有するの
事をも案する、二和室の節事、秋の行

そこの事

一 大隈房と早大南島者間に往々誤解を生
し四週隔の頃あるを夏に余教次南島
を往来し和解の端漸くひらく

一 十月十二日返書を撤し新築の事
に由り、川端植込等を監督す

一 余の新築を認め、九重を賜ふ
もの多し、答札に一時に殺

一 田舎主との結果五萬圓を完破
す三割の手数料を控除余の得る
所三萬六千餘圓、其に負債を償却
し、是方田庄友の信託を断り、

田舎界の空の飯果と云ふ

一 文藝春秋の嘱：応し「古本屋」と云ふ
の随筆の稿を寄る。漸全廿五回受く

一 早稲田の報の稿：応し「式典所感」と
寄の稿す

一 温交令として十五年創立記念として銀
札巻のカップ一双を贈らる

一 十月末日早大の幹部と共に大坂：赴
き早大の校史典の出陣帳を作る。校友
大人数に訪る。早大の史典の編集を
為す

一 大坂：到る。席：京都：遊び山好公の

遺址無跡を思ふ又名古庵に到り
日本ライインの海濱を試み同日五十年
前作の：報をえり得月梅：列り飲
み高時を述懐す

一 十一月初旬長崎静海灣へ行く。是
を早大以外に旅費おをも與ふ

一 以上英彦利令地へ持株廿五(五十年)
全額拂へる

一 隣家の社祠の地境を定めの約束書をも
交換し二十四回を切半し、その半
ばつ、を擔當して、その地境を

・ 余の随筆に朴泳春と探梅の記あり朴之
七歳及還本に一詩を録しと寄て未だ其漢
聖に揚ぐ

- 一 大改修の計多の爲に成し其新年類文を
樹に隨筆の序を定り手 尚全三十四日
一 矢吹の婿の二女久急性肺炎に罹り
十一月下旬夜上病院に入院の爲廿九日
八時卒終に逝く臨終の際洗礼を受
十二月二日市山聖三一教會堂に於て葬儀
と告別式を行ふ其年三十一歳夫吹に嫁し
七八年一男子を産く(一子産し)
一 教団會四十五周年の大會をいし、余が

由年會長の故を以つて紀念(ある間)と
贈る

- 一 嗣子病歿六月以來病床に在り
- 一 新築設計 果物の二萬六千圓(臨時
工費として)專家改修茶室修理川橋
改築材の買付等を包念す)



PLATE 27

モデル No. 10

